1998年5月1日発行（毎月1回1日発行）第7巻第2号（通巻62号）1992年12月15日第三種郵便認可

We

くらしと教育を
つなぐWe

1998

5

女と男の家庭科新時代

特集 学校・地域・家庭

複眼で見る学校
アーツ・センター構想
村上タカシ

子どもと若者の居場所
行政と住民の課題　久田邦明

カップルのゆくえ
日本にも脱結婚化の時代がくるのか？（1）
草野いづみ

みんなちがって、みんないい
向原恵子

いつの間にか元気になれる場所

フェミックスの
3つの部屋

あなたの悩みを共に考え、自分らしく生きることを応援します

◇カウンセリング
1時間6000円（予約制）
◇自己表現　自己主張トレーニング
◇カウンセリング講座、ワークショップ、アロマテラピー
◇公民館、女性センター、自主グループの講師もできます。

あなたの表現活動をサポートします

◇単行本、会報、リーフレット、ポスター、チラシ等の企画、編集、デザイン、校正、出版を引き受けます。
◇ヒアリング調査を請け負います。
◇講演会、シンポジウムの企画、コーディネートができます。

あなたの視野を広げます

◇くらしと教育をつなぐWe

A5判／64ページ　1冊630円
年10回発行　年間購読6800円

特集：フェミニズム／性　教育／福祉
高齢化社会／働く／家族　環境／民族など
共修の家庭科に役立つページ／実践報告／男の家庭科／エッセー
連載：水田宗子／木村栄／武田秀夫／蔦森樹／加藤昭仁他

Femix
フェミックス

〒154-0001　世田谷区池尻3－2－3－703
郵便振替　00130-7-754314（有）フェミックス
富士銀行　池尻大橋支店1501277
◆お問い合わせはTEL/FAX 03-3424-3603

くらしと教育をつなぐ

We

1998
5月号

特集
学校・地域・家庭

連載

● おんなが歳をとるということ　木村　栄 ……43

● シネマの魔 26
「沈黙の女」について（承前）　武田　秀夫 ……44

● いきいきごんぼ　桑田　良彦 ……48

● 変な子じゃないよね　滝野澤直子 ……50

● 染と織の歳時記(2)
——よもぎではじめての草木染め　吉村　美加 ……52

● 蔦森樹の巡業日記　蔦森　樹 ……53

● 本をめぐる
超！気まぐれなりれーえっせい(2)
——西村しのぶ『一緒に遭難したい人』　麻賀　衿子 ……54

● 自己表現トレーニング(2)
——肯定的な気持ちを伝える　河村　ふみ ……55

● 居場所考 36
——サイズの想像力　水田　宗子 ……59

◇ 読者のひろば …… 62

◇ 編集後記 …… 64

表紙、タイトルデザイン、カット／川口民子

くらしと教育をつなぐ We　1998.5　自立した女と男を

特集　学校・地域・家庭

★<インタビュー・複眼で見る>
学校アーツ・センター構想
村上タカシさん　<聞き手 稲邑恭子>　……4

★子どもと若者の居場所
—行政と住民の課題　久田　邦明……13

★カップルのゆくえ
—日本にも脱結婚化の時代がくるのか？（1）
草野いづみ……19

★みんなちがって、みんないい　向原　恵子……27

女と男の家庭科新時代

■家庭科 風がかわる匂いがかわる　分校　淑子……34
「自分」探し——家族の中の自分をみつめて

■楽市楽座　加藤　昭仁……40
——ソーセージづくり

■オホーツクの潮風荒く　江口凡太郎……42

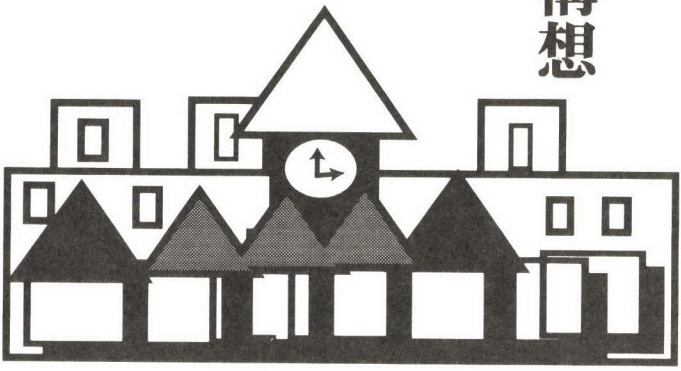
複眼で見る

学校アーツ・センター構想

村上タカシ

九四年と九六年の夏休みに、東京都杉並区立和泉中学校とその周辺で繰り広げられたNUMIWAKUプロジェクト。夏休みの校舎をいきなり美術館にしてしまおうという、学校・地域・家庭の枠を解体しつつ人々をダイナミックに巻き込んでゆく新しい芸術のありかたの実験であり、地域文化の創造の試みだった。その仕掛人である村上タカシさんにお話をうかがった。

プロフィール
熊本県生まれ。86年よりコバヤシ画廊等で個展を中心に美術家として活動を開始。版画、芸術学、教育学を学ぶ。最近は数々のアート・プロジェクトのプランナーとしても活躍。現在、現代美術を中心とし、芸術普及や人材育成、文化政策に提言をしていくための「アーツNGO：Japan Arts Center」の設立も準備中。



ＩＺＵＭＩＷＡＫＵができるまで

稲邑　ＩＺＵＭＩＷＡＫＵはどんなきっかけで始められたのですか？

村上　私自身、作品を創って銀座などで個展を開いていたのですが、そこに来る人はほとんどが、専門的な知識をもったアーティストや学芸員、大学の研究者で、二、三百人止まりです。もっと身近なところでたくさんの人に見てもらいたいと思い、路上に作品を置いたり、フェスティバルに参加したりしていたのですが、中学で美術の教師をやっていましたから、そもそも私の足元はというと、学校でしょう。じゃ学校を使ってしまおうと思ったんです。それも一人でやるわけにはいかないし、実際にやるんだったら本格的にやろうと、「学校美術館構想」を思いつきました。

最初は空想のアイディアでしかなかったのですが、私が個展で展示した企画書の作品を見たときに、いろんな人たちが、ほんとうにこんなことできるのか、もっと詳しく教えてくれと言って来て、自然と実行委員会ができてしまったんです。

稲邑　村上さんのご専門は？

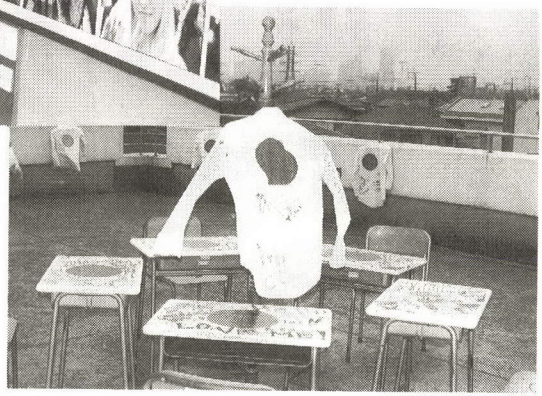
村上　版画です。シルクスクリーンとかリトグラフとか、現代版画が多かったのですが、今はそこから発展して空間を使うものとか、プロジェクト自体を一つの大きな作品にしています。現代美術は表現が多様ですから、彫刻とか、絵画とか、いろいろな要素が交差して、ジャンルにこだわらない表現が増えています。

学校で何かやろうと思ったのは、赴任した先の杉並の新しい学校がオープンスペースのモデル校で、これは使わない手はないと思ったこともありますし、美術室の片隅に現代版画を飾ったときの子どもたちの反応が非常に面白かったので、学校中にそういう作品を置いてしまおうと。だいたい私が思いつくときは単純な動機が多いんですけれども、その構想がどんどん膨らんでいっちゃう感じなんですね。

稲邑　学校でこのような企画を実現するのは大変だったのではないでしょうか？

村上　そうですね。きちんと手続きを踏まなければならないということがありましたから、その点では大変でしたけど。美術の先生たちでつくっている研究会が、期間中、共催ということで研修を組んで企画に関わってくれましたし、お母さんたちが主体になった「友の会」というのを自主的につくってもらって、実行委員会に入って学校にお願いをしてもらった。そして学校からＧＯサインをもらって、教育委員会の承諾を得るというかたちをとりました。ただ

ロブ・ランゲ：金髪の日本人



村上タカシ：1998アートピア構想

し、予算的なものはこちらで準備しなければならなかったので、三月の個展会場で企画内容を発表して八月にやったのですから実質的な準備期間は五ヵ月、もうほとんど寝ないでやることになりましたけどね。

稲邑　二回目は会場は同じでも、事務局を外部に移されたそうでしたね。

村上　一回目は学校を美術館に変えてしまおうという「学校美術館構想」でやったのですが、二回目はそれを、学校を地域の文化拠点に変えようという「学校アーツ・センター構想」に発展させ、地域のほうにも目を向け、川沿いの遊歩道や公園やNGO機関や商店街に作品を置かせてもらって、近くのギャラリーとネットワークを結んで街全体を美術館のようにしようという試みをしました。私自身も一回目は教員として内部から関わりましたが、二回目のときは研究所に出向していたので「学校を使った地域活動」として外部から関わりました。一回目は学校が事務局で電話や取材が殺到したり、いろんな人が出入りしたりして、さすがに管理面での問題が指摘されたのですが、二回目は外部に事務局を設けて対応したので、混乱を少なくできました。また書類を書いて学校を借りる手続きをふんでやりましたから、学校の先生が動かなくても外部の人でもやれるという一つの前例はつくれたとは思います。

稲邑　一度目も二度目もそれぞれ五千人以上の人が来られたとか。

村上　そうですね。ギャラリーでやるよりは桁違いの数の人が来てくれました。地域でやっていますから買い物帰りの人が寄ってくれたり、障害者施設から多くの人たちが来てくれるなど大賑わいで、学校がこういう使われ方もできるのかという一つのモデルを提示できたのではないかと思います。

アイディアはアーティストや市民サイドが、公共の空間や予算は自治体が、足りない機材や資金援助は企業のメセナ活動（社会貢献プログラム）が出し、その三つの協力関係がうまくつながれば文化交流ができるというシステムの提案なのですね。

美術館や文化ホールは八〇年代にいっぱいできたのですが、とかく「ハコモノ」行政で、施設の建設費と維持費に九〇％以上の予算を使い、なかなかソフト面までは充実していません。これからは「ハコ」を作るより文化事業費に目を向けた方がいいと思います。もちろん美術館はあるに越したことはありませんが、国公立の美術館は全国で一五〇くらいしかないし、九〇％以上の自治体にはまだない状況です。また専任の芸術普及担当者を置いていない美術館が六一・五％にもなるので、いずれにしろ、美術館に変わりうる何らかの「社会装置」が必要だと思います。その点で学校はどこの自治体でも必ずありますから、文化拠点になりうる施設としては最適なのです。

欧米では「パブリック・アート」や「美術館なき美術館運動」というものが盛んで、多くの人たちが参画しています。一九九六年の一月「ヨーゼフ・ボイスと一〇年」というボイス（二〇世紀現代美術の巨人）が他界して一〇年目の日に合わせて、展示やシンポジウム等を企画しましたが、彼が提唱した「社会彫刻」（社会全体を一つの有機体として見立て芸術活動を媒介に社会をよりよい形に変革していこうとする考え方）という概念はまだまだ日本では定着していないし、一つの概念が定着するには二十年から三十年ぐらいはかかると思います。日本で比較的その概念に近い（決して同じではないが）のは「社会教育」の考え方ですが、「社会体育」（学校外の生涯学習の中のスポーツ・文化活動）というセクションが日本では既に行政の中にあるように、「社会芸術」というものが一つの概念として行政や一般社会でも定着するようになればより近くなると思います。

社会教育の充実

村上　二〇〇二年から学校教育が完全週五日制になるよう

ですが、そうすると子どもたちの行き場所のことを考えなければならない。ヨーロッパの学校は五日制どころか四日制になっているところもあるようですが、社会教育の施設が充実していたり家庭や地域の文化プログラムがあったりボランティア活動がさかんだったりと、社会的な受け皿が整備されています。日本のように、そのようなものがないまま、ただ週五日制にしようとするのは無理な話なんです。学校でできなくなったものを社会教育で補い、学校教育と社会教育が両輪となって教育環境を考えなければならない。いま学校と社会教育の公的な教育費の比率は九対一で、あまりにも学校教育が肥大化してその比重が大きい。あらゆることが学校に持ち込まれるので、先生たちも対応しきれないでお手上げ状態になります。社会教育を充実させるという発想はまだまだ一般的でないのですが、生涯学習という考え方に立てばいずれその部分は重要になっていくと思います。

稲邑 そういえば、子どもの教育というと学校教育ばかりで、子どもの社会教育という視点は少ないですね。

村上 いまは学校を使った学校教育だけなのですが、学校を使った社会教育活動や地域活動も同時にあっていいわけで、その部分が欠けているから、いま学校が全部抱え込んで大変なのです。詰め込みすぎの学校のカリキュラム自体も、それを完全に見直し、学校教育を午前中だけにして午後から社会教育活動にということもできるのだけど、今の状況でいけば、地域や家庭の受け皿がないのでせっかく授業が早く終わってもまた別の学校に預けなきゃということになる。学校教育のうち、学校でやらなくてもいいものを洗い出して、それを社会教育に移行するという手続きが必要だと思います。

学校が上級学校の予備校化しているという状況があるので、受験制度と高等教育の内容が変わらない限り、そのしわ寄せが中学に下りて来るのは避けられません。小学校でいくら絶対評価で自主的な教育をやっていても、いきなり中学校で相対評価になってしまうので、そのカルチャーショックでストレスがたまるし、いろいろひずみが来る。いま中・高一貫教育ということが言われていますが、義務教育である中学校とそうでない高校をつなげるのには無理があります。それよりもむしろ中学校に行っても流れが変わらないですむ小・中九年間一貫の義務教育のプログラムを考える必要があります。公教育の場で人間として地球市民として必要なことをやる。その意味では受験教科でない芸術教科の役割が大きいと思うのですが、逆にいまだに「主要教科」（差別用語であり死語にすべきだと思うのですが）がメインになって、他の教科は趣味・特技みたいな感覚しか

ない。中学の芸術教科の時間数は十年くらい前からみて半分くらいになっています。減った分はどこに行ったのかというと、受験教科に行ってしまった。

それに、子どもの時しか体験できないものもあります。おとなになってから感覚的なものを身につけようと思ってもなかなか身につかないのです。特に幼少の時は表現活動が大事ですし、創造性を活かすためにもそれは必要です。

稲呂　美術のお話をうかがい、冷遇されているということでは家庭科も同じだなと思いながらうかがっていました。料理裁縫の科目という従来のイメージを超えた家庭科をめざして意欲的な〈考える〉授業を展開してきた先生たちの多くが最近は理詰めの授業にある種の限界を感じ、手仕事や五感や感性を大切にするような授業の中に新しい可能性を模索しだしているような気がしています。

村上　アートはその点、間口が広く応用ができるんです。総合的な学習がいわれるようになったので、家庭科の先生が美術の先生と一緒に、地域の人を巻き込んで何かやれる可能性は大いにあります。公立学校で地域の特徴を活かしましょうというのがあるようだけど、減点主義と事なかれ主義で、なかなか現実的にはむずかしい。プラス思考になっていろんなことができるかたちにしたほうがいい。権限を地域や学校におろせるようになるといいと思います。米国ではチャータースクールといって、個々の意欲ある先生が何人かで学校を創るのが、全米的に広がっています。丸暗記型の授業だと、ついて行けない子も、分かりすぎて退屈な子もいて、生徒のニーズに合っていない。学校という閉鎖的な空間の中で画一的に同じような人をつくる発想が良くないわけで、誰だって興味関心を持ったときに素材を与えれば吸収できるんです。受験英語にどっぷりつかった世代は英語が嫌いになるだけだったでしょう。芸術教科もそうです。本来は一人ひとりの個性を活かすものであるはずなのにそうなっていない。本物そっくりに描くとか、デッサンなどは点数をつけやすいので受験課目になるんですが、それは一つの表現でしかない。もっと多様な表現を見るには違った物差しをいっぱい用意しなければならないんです。それができないのは大学の先生の怠慢なんですよ。受験そのものはなくならなくても、受験内容がもっと一人一人の個性を活かすとか、表現の多様性を見るというものに変わっていけば違ってくるんですよ。

アートは多様性の表現

稲呂　初めてIZUMIWAKUのお話を伺ったとき、自己表現、感じること、つながるという三つのキーワードが

浮かんだのですが、これは全部学校教育に欠けていることでしょう。アートというのはこれらを全部含むのではないかと思ったのですが。

村上　今の三つのキーワードは現代人として欠けている部分、軽視されている部分でしょう。逆の見方をすると、中央集権的な価値観の強制が上から下へおりてくる閉鎖的なシステムの中で自分を殺して生きなければならないとき、こういう要素は不都合だったってことなんですよね。その点、アートは四十人の子がいたら四十通りの答えを引き出すような教科で、性格が全然違うんです。

稲邑　多様性の表現でもある。

村上　そう、多様性ですよね。一人ひとりの表現を大事にしていく、またつながりという部分でも、個人や学校でやるだけでなく地域でやっていくとか、いろんな機関と連携してやるということが出てくる。これからは学校はいかに地域の文化拠点としてやっていくかが大事になってくると思います。

　ただし、それをうまく運営する人が必要なんです。いま、開かれた学校が必要だというのは誰でも言っているのだけど、それを実際に実践しているところがどれだけあるかというと、そういう地域交流のディレクターみたいな人がいないんですね。いまはしようがないから教頭先生がやってる。これからは生涯学習の時代なんだから、生涯学習機関として学校を使う際に独自のディレクターみたいな人を複数置くというのも一つの手だと思います。いまは児童数が減り、先生がかなり余っていて、チームティーチングで配置している先生がいるくらいですから、先生が地域のコーディネーターの役割で動いてくれればいい。教室も余ってくるはずなので、空き教室をうまく使いコミュニティセンターとして使う。人と場所が確保されれば、地域は活性化される。要するにアイディア、やりようでしょうね。

稲邑　学校と行政、美術館の間でスタッフを交換しあうことを提案されていましたね。

村上　いったん入ってしまうとずっとそこで同じような仕事をしなければならないような閉鎖的な中でやっていくよりも、連携できる機関があれば、その人の特技や適性を活かして中で移動できるようなシステムを創ればいいと思うんです。学校や社会教育機関や一般行政職の中の文化部や街づくりのセクションの中で相互に移動しあえることができればいいと思います。政令指定都市ではそのことが可能だし、熊本県とか川崎市など、実際に既にやっている所もあります。それは自治体の判断でできるのだと思います。

　またハコモノがなくても、廃校でも空き教室でも公民館でも文化拠点になりうる。概念設計をして建築家と組んで

製図おこしをして、それから関連機関と調整をしてプレゼンテーションをする。そういうものが美術館を建てることより現実味を帯びてくると思います。一極集中でなく分散された地域に根ざした拠点として、美術館の部分的な機能、つまり調査研究、展示、人材育成、芸術普及などの要素をカバーできればと思っています。

稲邑 ＩＺＵＭＩＷＡＫＵには企業からの援助はなかったのですか？

村上 一回目は半年ぐらいしか準備期間がなかったので、時間的制約があったのです。それでも企画書を企業向けに創って郵送したりお願いしたりお母さんたちが回ってくれたりというのはあったのですが、日本企業はほとんど話を聞いてくれませんでした。企業からの支援は増えてきたとは思うけど、まだまだです。幸いに地元の外資系企業とか何社かメセナ活動ということで支援してくれました。とにかく、やったことで記録を創り、テレビ、雑誌、新聞などいろんなところで取り上げられた資料もありますからこれからはそれを使えます。

いままでの美術館は最初に分厚いカタログを創るのだけど、なかなか活用できるものがない。ＩＺＵＭＩＷＡＫＵで創ったものは、ビデオとＣＤ―ＲＯＭや普及用のアウトリーチ本等で、これらは学校の授業でもすぐに使えるようになっています。実際に足を運んでみてもらうという展開の他に、これからは、来られない人にも対応できるものを残す必要があると思うんです。例えばインターネットを使ったヴァーチャルな美術館などもその一例ですが、アウトリーチ活動の側面が必要になってくる。私はプランニングが一つの作品だと思っていますから、自治体や企業やマスコミの人たちと協力して創っていきたい。ギャラリーや美術館だけでなくインターネットの中でも本やテレビの中でも表現は可能ですから。

稲邑 これからまた何か新しいことを企画していていらっしゃるのですか？

村上 そうですね、やりたいことはいっぱいあるんですけど、取りあえず拠点創りをやりたいし、文化が発展していくシステムの提案をしたいと思っています。ＮＰＯ法案が成立したので、アーツＮＧＯをぜひ創りたいと思っています。福祉や環境や人権問題のＮＧＯ機関は歴史も実績もあるところが多いけど、文化活動を切り口にした国際交流や人材育成をやっているところはなかなかありませんから。

ＩＺＵＭＩＷＡＫＵのときも、プロジェクトの事務局のスタッフが二〇名くらい、アーティストが三〇名、友の会二、三〇名が参加してくれたのだけど、期間が終わるとバラバラになってしまう。今までの活動が蓄積された情報と

して、そこに行けばいろんなことが分かるという拠点がないと、どうしても一過性のもので終わってしまうんですね。関心がある人は非常に多いので、ある程度継続的な活動をやっていきたい。アートプロジェクトの企画をしたり、リサーチしたり、人材育成ができればいいと思っているのですが、それがきちんとNGOのような形で位置づけられてくれば変わってきます。それまでは人にしろ、事業費にしろ、公共の機関が押さえていて、美術館が予算を組んで誰かを招聘して、「これがアートですよ」と紹介されて終わってしまっていたのが、今度はもっと自分から発表できるようになりますから。

IZUMIWAKUのような試みも、また機会があればやりたいと思っています。ここ（杉並区）でなければできないとか、私がいなければできないというのでなく、要するに全国津々浦々に飛び火していくのが狙いですから、どこかの自治体で企画がジョイントできればいいと思っています。IZUMIWAKUと呼応して九五年に岡山市の御野小学校でも面白い試みがありましたし、廃校を使ってのプロジェクトはあちこちで試みられています。

＊　＊　＊

プロジェクトに関する資料請求及び内容に関する問い合わせ、ビデオの注文先は左記の通りです。

〒177-0032
東京都練馬区谷原 4-11-38　555 Arts And Act
TEL 030-905-4477 FAX 03-3904-8638

ビデオは「IZUMIWAKU 1994」の関連企画やパフォーマンスまで含めた全作品の記録で、CD-ROMは参加したアーティストの作品を中心に現代美術をやさしく解説しそのまま学校等の教材としても使用できます。

「IZUMIWAKU Video 1994」98000円
CD-ROM「What's Art?」7000円
CD-ROM＋Video 15000円（税込）

学校・美術館等で購入の場合、美術出版教材カタログ（美術出版社サービスセンター編）
Video：53-1060　CD-ROM：55-44301

アーツ・センター構想の設計思想を含めたIZUMIWAKU Projectの企画内容及び、名称等は知的所有権として登録してあります。

All Right Reserved, Copyright（c）1994-1998. 555 Arts And Act（知的所有権協会101377・101378.1997）

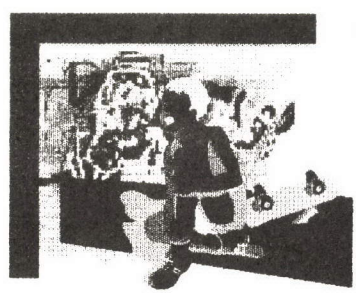
特集

学校　地域　家庭

子どもと若者の居場所

行政と住民の課題

久田邦明



わたしの子ども時代

小学校の二年生か三年生の頃のことだった。下校途中の川沿いの道の脇に、そのおじいさんの隠居所はあった。

農家の別棟の古い小さな建物で、開け放した入り口すぐのところが土間で、土間の左側の一間に将棋盤が置かれていた。将棋盤は二つ並べてあった。そのうちの一つを、おじいさんとその友だちが使い、もう一つを、子どもたちが使った。わたしは、そこで将棋を憶えた。

わたしが記憶するおじいさんの姿は、坊主頭に、ふんどし一つのである。そういう姿の小柄なおじいさんのいるところへ、子どもたちがワイワイ集まって将棋をさしていたわけだ。今ではちょっと想像しにくい情景だろう。おじいさんは決して愛想の良い人ではなく、むしろ寡黙な人だったと記憶するが、それでも子どもたちがそこへ集まったのは、居心地の良いところだったからにちがいない。

三十年以上前のそんなエピソードを思い出したのは、娘が学童保育を終えるに当たって、保護者の記念誌に文章を書くことになったときだった。それまですっかり忘れていた、このおじいさんの隠居所の情景がよみがえってきたのは、学童保育の役割に感心していたわたしが、自分の子どもの頃にもそういう場所があったのだろうかと考えたからだ。

もしかすると、あのおじいさんは、なかなかの見識をもった人物だったのかもしれない。自分たちが楽しむだけならば、将棋盤は一つでよさそうなものだ。それが二つ置いてあったのは、自分たちだけでなく、子どもたちのことを考えたからではないだろうか。学校の先生のような教育的な意図があったわけではないだろう。しかし、そこには、子どもたちが気軽に上がり込んでひとときを過ごす条件が備わっていた。

母親の話によると、おじいさんは近所で評判の働き者だったが、どういうわけか、四十歳過ぎに早々と息子夫婦に農業を任せて、さっさと隠居してしまった人だという。わたしの記憶するエピソードと重ね合わせてみると、世間並とは少しちがった生き方を求めた人だったのかもしれないと思う。

今日でも、子ども好きの人は少なくないだろう。しかし、そういう人たちの活動は、おじいさんの隠居所とはちがって、大人の方に余裕がなく、自分の境遇の頼りなさを子どもに助けてもらおうとする、情けないものになっているような気がする。

居場所への視点

おじいさんのことを最近再び思い出すことになったのは、子どもや若者の居場所について考えるようになったからだ。

この二年間、東京都生涯学習部の『家庭教育に関する調査研究報告書』の作成に関わった。この仕事を依頼されたとき、わたしは即座に「子どもと若者の居場所」というテーマを提案した。それは、今日の子どもや若者の現状をみるには、「居場所」がキーワードになると考えたからだ。

社会教育研究者のわたしが、子どもや若者の居場所に着目して行政の施策を提案するとすれば、地域の公共施設の役割を考える必要があるだろう。そう考えて公共施設をみると、そこには多くの問題がある。

そもそも、公民館などの社会教育施設には、小学生や中学生が自分たちだけで利用する仕組みがない。利用する場合には、年長の引率者を必要とする。公共施設は全ての住民に開放されているはずだが、子どもや若者は「住民」から除外されている。

これについては例外的な施設もある。例えば、大阪府枚方市の公民館の場合、小学生や中学生も、団体登録をして施設の利用申込書を提出すれば利用できる。団体登録用紙と施設利用申込書は、B6サイズの簡単なものだ。団体登録は名目的なものなので、その日かぎりの利用でも構わな

い（公民館は団体利用を原則とするために登録が必要となる）。しかし、このような事例は極めて稀なものであり、大部分の公共施設は若い世代の利用者を想定していないのである。

また、公共施設のロビーをめぐる問題がある。中学生や高校生が、地域の公共施設のロビーにたむろする例はめずらしくない。彼らは、ときに大声で騒いだり、タバコを吸ったり、グループ同士いさかいを起こしたりする。青少年に理解のある職員の場合でも、利用者から苦情を受けると、放置するわけにはいかなくなって、彼らを追い出すことになる。追い出された彼らは、他の施設へ行く。そこも追い出されると、公園やガード下へ行く。まるで哀しい放浪者だ。

ロビーへやって来るのは、元気の良い子どもたちだけではない。六、七年前のことだが、児童館の職員から、ある中学生のエピソードを聞いた。その中学生は、下校途中に毎日その児童館へやって来て、ロビーの椅子で職員と話をして帰宅する。親しくなって事情を聞くと、学校でひどくいじめられているという。彼は、児童館の職員とあれやこれやの世間話をして、エネルギーを補充していたわけだ。大変印象深い話だったので、その後、機会をみては公共施設の職員に尋ねてみた。その結果、いじめられていたり、不登校だったりする子どもたちが公共施設へやって来る話はめずらしくないことを知った。

このような事例から分かるように、地域の公共施設は、条件さえ整えば、子どもや若者の居場所になる。大人は、少年事件が起こる度におおげさに嘆いてみせて、様々な対策のメニューを提示するが、彼らのことを本当に心配するのであれば、まず身近なところから考えてみることにしたらどうかと思う。その一つが、公共施設に期待される役割である。

新しい公共施設

若い世代にとって閉鎖的な公共施設の現状を変えていこうとする試みも、数は少ないが行われるようになっている。そのような事例を幾つかみておきたい。

国分寺市立恋ヶ窪公民館の運営審議会答申（一九九七年九月）では、小中学生も一般の利用者と同じように部屋の利用ができるように規則を改めることを提案している。これまで、このような基本的な施策が行われてこなかったことが問題であり、公民館の一般的な状況からすれば、とりわけ注目される提案である。

高崎市立中央公民館では、住民のボランティアが中心に

なって、不登校の児童生徒のための居場所を、週三日、和室を使って運営している。この事業は、教育委員会の学校教育部局が「適応指導教室」を地域の公共施設でも実施しようとして発案したものだった。そのような提案を受けた公民館の側では、公民館で実施するのならば公民館らしい事業にしたいと考えて、公民館のカウンセリング講座の修了者の住民ボランティアに関わってもらうことにしたという。

横浜市都筑区のキッズパーティーは、主婦の社会教育指導員のアイデアで、三年ほど前に始まったもので、数人のボランティア（母親たち）が中心になって、月に一回か二回、週末の学校施設を利用して小中学生を遊ばせるという小さな活動だ。区役所は、立ちあげるための準備の手助けをしたり、少額の補助金を支出したりする。開催日には、ボランティアは、小さな子どもたちのためにちょっとした手遊びを用意するとともに、体育館などを開放して、子どもたちを自由に遊ばせる。わたしも、昨年夏に立ちあげたところへ見学に出かけたが、初日にもかかわらず、八十人ほどの子どもたちがやって来ていた。今後、中学校区に一つの割合ですすめていく計画だが、今のところまだ三か所でしか行われていない。このようにゆっくりしたペースですすめられているのは、行政主導を避けて、「やる」という意志をもった住民が手を挙げたところから実施しているからだ。

財政状況が厳しいといわれるが、このような事例からも分かるように、知恵を出し合い、工夫することによって、僅かの費用で、地域社会に若い世代の居場所を確保することはできる。

以上のような手づくりの活動とはちがって、本格的な施設も誕生している。次に、そういう事例を紹介する。

東京都世田谷区のホットスクール「城山」は、廃園になった区立幼稚園の施設を利用した、不登校児童生徒のための施設だ。退職教員や元社会教育主事のベテランと教職志望の二十代の若者たちのスタッフが、住宅地のなかのまるで個人住宅のようなこじんまりとした施設で、スポーツ、学習活動の援助、レクリエーション、体験活動、料理の会、園芸などの活動を行っている。ここは、これまでの適応指導教室とはちがって、不登校児童生徒の民間施設の運営のやり方と似ている。

東京都杉並区に昨年九月にオープンした区立児童・青少年センターは、他に例の少ない、中学生と高校生のための本格的な施設だ。体育室、ホール、音楽スタジオ、ファミコン室、学習コーナーなどが備えられている。広いロビーには、飲み物と軽食の自動販売機が置かれているし、簡単

な調理もできるようになっている。施設づくりには、中高生委員会が組織されて、提案をまとめた。また、施設が完成した後も、中高校生の運営委員会が活動している。運営には苦労が多いのではないかと想像するが、杉並区では、これまでにも既存の児童館で「中高生タイム」など、中高校生の利用をすすめる試行錯誤を続けてきた。中高校生への対応の蓄積があるので、この施設を運営する職員には期待ができる。

大阪城公園にあるプラネットステーション（大阪府青少年会館別館）は、演劇、音楽、映像製作のための施設で、若者に人気のある分野の活動ができるように工夫されている。また、テクニカルスクールという講座を受講すれば、機材を自分たちで操作することができるし、ボランティアスタッフとして登録されると、事業の企画や運営に参加することができる。民間の貸スタジオとはちがって、利用者が施設の運営に関わる仕組みをとっている。そして、それが同時に若い世代の集団的活動の組織化を支援することにもなっている。

行政と住民とのパートナーシップづくりを

少年事件が起こると、学校の持物検査やナイフの販売規制が話題になる。しかし、効果の期待できない、その場しのぎの対策は、大人への不信感を増幅させるだけではないだろうか。その一方で、コンビニエンスストアや公園にたむろする子どもや若者に対しては冷たい視線が投げかけられている。

今求められているのは、若い世代に対する直接的な対策ではなく、媒介的な支援なのではないだろうか。いつの時代でも、子どもが大人になっていく過程では、彼らが独自に組織する小集団が、大きな役割を果たしてきた。彼らはそういうところで将来社会生活をおくるための共同性を学んできたのである。ところが、今日では、そのような小集団がほとんど消滅してしまっている。ここのところにこそ、様々な問題の根があるのではないだろうか。そうだとすれば、大人の役割は、若い世代がそのような小集団の組織化をすすめるための支援をしていくことである。

そのためには、どのような方法が考えられるだろうか。その可能性を行政の施策との関連で考えてみると、どうだろうか。

青少年に対する行政施策は、これまで自治会・町内会や子ども会などの地縁団体、そして地域の世話役が選出される行政委員に頼ってきた。ところが、最近では、このような団体や行政委員がうまく機能しなくなっている。中央教

育審議会の答申などでは、地域の教育力の回復が繰り返しいわれているが、そこのところで前提とされている生活共同体としての地域社会は、すでに失われている。

このことを深刻に受け止めているのは、行政の第一線で仕事をしている地方自治体の職員だろう。行政施策をすすめていくには、何らかのかたちで住民の協力を得ないわけにはいかないが、それが極めて難しくなっているからである。行政が住民の意向を無視して勝手なことをやるという批判もあるが、行政の施策は、何らかのかたちで住民の協力を得ないかぎり現実化しないものである。そのせいで、形骸化した団体や行政委員の活動であっても、簡単に退けるわけにはいかない。

一方、従来の団体や行政委員の活動に代わって、新しいタイプの住民活動が注目されるようになっている。不登校や引きこもりの子どもたちへの対応をはじめとして、これまでにみられなかったかたちの活動が生まれており、そこでは、ボランタリーな意志をもった住民が活躍している。実際に活動している人の数は少ないが、そのような活動の必要を意識する住民は決して少なくない。若い世代の現状に心を痛めて、彼らに貢献するために動き出そうとしている。しかし、そこで壁となるのが、行政と密着した団体や行政委員の存在だ。

これまでの行政手法は、利害の共通する団体や利害を代表する有力者と結び付いて施策をすすめていくといった方法が一般的だったが、このような方法は通用しにくくなっている。その一方で、行政とのコネクションはなくとも、行政に対して説得力のある提案を示すことによって、施策を実現させていく道が開かれつつある。楽観的に過ぎるかもしれないが、このような可能性に着目すれば、若い世代に対する施策を考える場合にも、これまでとはちがった方法で行政とのあいだのパートナーシップを追求していく可能性があるのではないか。その一つとして、公共施設を子どもや若者に開放したり、行政と住民の協力によって彼らの居場所を確保したりする活動が考えられる。

そのような活動は、たんに子どもや若者のためだけのものでなく、これまでとはちがったかたちで行政と住民のパートナーシップづくりをすすめていくという、広く一般的な意味をもった活動でもあるといえるだろう。

（ひさだ・くにあき／神奈川大学講師 専攻 教育学・社会教育史）

特集

学校　地域　家庭

カップルのゆくえ

日本にも脱結婚化の時代がくるのか？（1）

草野いづみ

昨年十一月に東洋大学とストラスブール三大学との共同で『カップルのゆくえ―日本にも脱結婚化の時代がくるか？』と題するシンポジウムが開催された。「これまでの家族構成が大きく変化し、婚姻制度にとらわれないカップルが増加していく中で、家族を取り巻く現状について日本とフランスの社会、経済、法の立場から考える」という内容であり、フランスから三人の研究者を招き、各分野からの興味深い発表・討論が行われた。その要約を三回に分けて紹介していきたい。

まず一回目は「カップルと子どもの関係はどう変化しているか？」について。ルイ・パスツール大学心理学・教育学部講師のアン・テブノーさんと、東洋大学社会学部助教授の森田明美さんに、仏日、それぞれの場合について報告を受けた。

【報告1】親の離婚が子どもの心理的な発達に及ぼす影響

アン・テブノー

人間はその形態がどのようなものであろうと、家族と呼ばれる集団の中でアイデンティティを形成する。一九七〇年代以降フランスで見られる家族の変化は、それにどのような影響を及ぼしているのであろうか？

七〇年代以降のフランスにおいて家族とカップルに起きた変化の基礎にあるのは、結婚制度の衰退（脱結婚化）である。第一は結婚数の減少、第二に離婚数の増加、第三に法的結婚が減ってユニオン・リーブル（自由な結びつき）といわれる同棲・内縁関係の増加があげられる。

一九六四年には結婚した一〇〇組のカップルのうち一〇組つまり一〇％が離婚していたのが、九〇年には四〇％に増えている。離婚は少数の人だけが経験する事故のようなものではなく、誰にでもあり得る問題として感じられるようになっている。法的結婚の減少と離婚の増加によって結婚の意味が変わってきているのである。

「必ずしも結婚しない」形態を望んでとるカップルが増加し、統計研究所によれば、七五年には四四万六千件だったのが、今日では一七〇万件に達している。そして同棲は婚外出生つまり同棲関係で生まれる子どもの数の増加によって、男女を結び付ける関係にとどまらず家族を形成する意味を持つようになってきている。

また一方では、離婚あるいはカップルの別離が起きる時期が、だんだん子どもが幼い頃に移ってきている。そして、両親が離婚した子どもの八五％は母親の住居で暮らし、すでに一〇〇万人以上の母親がそのような形で子どもを育てている。また離婚が増えると子どもにとっては複数の父親の問題が出てくる。実の父親は日常的には子どもの世話をしておらず、現在の母親のパートナーの男性が子どもを育てているのだが、その男性が子どもにとって父親の地位にあるのかどうかという問題が生じる。

親の離婚を経験した子どもたちの受ける心理的な影響について、七〇年代の終り頃からさまざまな研究が行われた。一般に受け入れられている考え方として「両親が離婚した子どもは、一生にわたってそれによって心理的な影響を受ける」というものがあり、例えば学校の勉強や行動上の問題が離婚のせいだと考えられてきた。しかし調査によれば、両親が離婚しているからといって他の子どもたちと比べてとくに心理的病理的な問題もないし、その兆候も示していないという結果が出た。むしろ離婚を経験した子どもたちは学業に非常に精を出し、知的な発達が著しいということがみられている。

これを解釈すると「子どもたちは両親が離婚したということが自分たちのせいであると考えたくないと思っていること、そして両親の離婚についての子どもの罪悪感や悩み・不安が周囲の人々には聞こえてこない状況にある」ことがうかがわれるのであり、その状況こそを私たちは心配

すべきだと思う。

夫婦は男性と女性としてのカップル、子どもに対する親としてのカップルという二つの関係がある。離婚すると男女のカップルとしての義務は解消されるが、子どもに対する親としての義務は残る。さまざまな研究の結果、親の離婚によって子どもたちが本当に苦しんだり被害を受けているのは、離婚した両親が相変わらず親としてのカップルとしても不和の仲にあることで、離婚に至ったこと自体ではないということである。

もう一つの問題は、父親の不在の問題である。片親によって育てられている子どもの親は多くが母親であって、父親と会うことがほとんどなくなっていることがわかった。父親の不在が子どもにどういう影響を与えるかということは、母親が自分の夫であった子どもの父親がいなくなったことをどのように意識しているかに依っている。

思春期の子どもたちが両親の離婚をどのように経験しどのように意識しているかという研究の結果をみると、両親の離婚を経験した子どもたちは生涯にわたって「なぜ自分の両親は別れてしまったのだろうか」と自問自答を続ける。子どもたちが問いかけるのは、離婚の原因ではなく、それが自分たちにとってどのような意味を持つかということである。子どもたちはまず両親の離婚について自分たちにどのくらい責任があるのかを問う。次に両親の離婚によって、男と女の関係が非常に危険なものだというふうに見えてきて、自分がそういう関係に入り込むことに躊躇を感じる。三番目には両親には自分が生まれる元になった欲求がお互いにもうなくなっているのだろうかという問いかけをする。もちろんたとえ両親が離婚しなくても、思春期に至った子どもたちはこのような男女関係についての問いをするものだが、ちょうどトランプゲームの持ち札が変わるように、両親の離婚によって考える要素が変わってくる。

このような変化は、家族のありかたが現代フランス社会に適応すべく試行錯誤を重ねている結果であって、必ずしも病的なものと考える必要はない。ただ、離婚を生きることは難しいし、非常に混乱を招くものでもあるし、家族が散り散りになることでもあり、このような変化を生きている人々に対して精神的な葛藤を引き起こしていることは事実なのである。

しかし、同時に離婚を克服していくことは常に可能である。離婚がどのように行われるかによって親自身、あるいは子どもが病的な影響を受けるか受けないかが決まってくる。離婚したという形式的な出来事ではなく、それがどの

ように当人あるいは子どもによって生きられ、語られ、あるいは語られないかということが、どんな影響が出てくるかに結びつくのではないかと思う。

【報告2】シングルマザー、シングルファーザーと子ども

森田明美

現代日本の家族の特徴は単身化、小家族化が進行していることである。その要因は第一に結婚する人の減少と晩婚化。第二に離婚の増加。とくに二〇代の離婚率の増加と子どもがいて離婚する人の増加である。親の離婚を経験する子どもの数は一九五〇年には四七二人に一人だったのが、九四年には一四四人に一人と三倍になっている。また離婚時の親権は五〇年には父親が取るのが四七・八%だったのが九四年には一八・九%と下がり、母親が取るのが七六・二%と父親から母親へ移行している。また再婚が増加している。

第三に結婚しても出産しない人が増え、子どもを産む数が減少している少産化の進行があげられる。また、少しずつではあるが確実に、これまで日本の典型的な家族と言われていた「結婚している夫婦と子ども」という核家族モデルは変化しつつある。それは一人親の家族や再婚した家族、結婚しないで出産した未婚の母の家族の登場である。

一人親の家族は統計上は六〇年代から八〇年代までは増加したが、八〇年代後半以降は減少傾向にある。現在約七九万世帯、全世帯の一・九%が一人親の家族で、その子ども数は一三六万人といわれている。未婚の母は増加しているが、三万七五〇〇世帯にすぎない。この原因は再婚の増加と少子化によるものといわれる。

日本は人工妊娠中絶が合法であるが、その統計には母親の婚姻状況は明らかになっていない。唯一妊娠一二週を過ぎた中絶（全中絶の六%）の統計に明らかになっており、九四年ではこの時期の中絶の六五・四%が婚姻外の妊娠とされている。これと同じ割合で全中絶中に婚姻外の妊娠中絶があるとして推計すれば、婚姻外の妊娠中絶は二四万件であり、その数は出生児数約一二四万人の約一九%にあたる。

婚姻外の子どもの出生があまり増えない原因としては、日本では婚姻外で子どもを産んで育てることが社会的に受け入れられにくく、法律的にも経済的にも障害が非常に大きいことが指摘されている。それが婚姻外の出産や離婚して一人親で子どもを育てることをためらわせる要因となっ

ていることが考えられる。

こうした社会で一人親で子どもを育てる際に、どのような問題が子どもとの関係に生じているのだろうか。私も参加した「日米のシングルマザー、シングルファーザー調査」の結果からは次のような問題が浮かび上がってきた（面接調査で八七年度から八九年度まで日本一一一人、米四四人の働く母親を調査。九三年度から九五年度まで日本四一人、米五一人のシングルマザーを調査。九七年度から日本一三人、米一五人のシングルファーザー調査進行中）。

日本の女性は結婚や出産で退職するケースがまだ多く、シングルマザーになって再就職したいと考えても、仕事から離れていると労働者として価値が低く評価される。また子育てと仕事の時間調整が必要となるため、再就職に不利な状況にある。さらに保育所の保育条件は企業が要求する労働時間を保障するには不十分なため、正規雇用者として働くことは難しい。こういう中で子育てしながら暮らせる収入を女性一人の労働で得られる仕事を探すことは容易ではない。

厚生省の調査では、シングルマザーの世帯収入は平均で一般世帯の約三〇％。子どもを育てるのに経済的に限界のところで暮らしている世帯が多い。私共の調査でも、民間の生命保険や学資保険の掛け金が一般世帯より無理に高い世帯が目立ち、健康への自信のなさが危機感を表している。

調査では、母親たちは仕事と子育てに大変忙しく、時間的・精神的余裕がなく、子どもとのコミュニケーションが十分にとれないという事例が多くみられた。また、親と子が二人だけで向き合っているために対立を回避しにくく、思春期の子どもへの対応、とりわけ男児の子育ての悩みが多かった。高校や中学を卒業してすぐという早い時期に子どもが家を離れていくケースが多いのは、こういった親との関係を反映しているものと思われた。

こういったことからも、シングルマザーが子どもと十分なコミュニケーションをとれるような労働時間や精神的ゆとりを保障していくことが必要であろう。また、子どもが親だけでなく複数の大人の多様な価値観と交流する機会を得ることが大切であり、周囲の大人の支援が必要である。

一方、調査ではシングルファーザーには三つの形がみられた。第一は家事育児を一人ではできないため、自分の親や親族の家庭に同居しているケース。こういう場合は父親は自分の生活を変えないですむが、子どもが祖父母の子どものようになって父子関係が十分に形成できない。

第二は母親不在を強い姿勢で一人で乗り越える形。誰に

も頼らず、子どもの生育に合わせて職業を変えたり、残業や出張を断るなどして仕事の仕方を変え、収入を激減させても子育てをほぼ独力でやってしまうタイプ。こうした場合、暮らしに足る収入が得られるなら仕事を減らして子育てに力を注げるが、仕事を減らすことによって収入が減ってしまうため、一般的には保育所利用や、子どもたちだけで夜留守番するという形になる。この状況は子どもたちに早い自立を要求する。子どもたちは父親の努力を知っているだけに背伸びして理解しようとして精神的・肉体的に疲れてしまい、不登校や身体の不調を訴える事例が多く出ていた。父親の頑張りが限界にくれば育児放棄ということにもなってしまうであろう。

第三には自分の仕事はあまり変えず、子どもたちにも理解を得て、家事援助者などを利用しながらシングルファーザーの家庭を築いていく形。父親と子どもの家事能力を育てるような支援が十分に行われるならば、地域の中で生きていくことができる。

調査からは日本ではシングルマザーもシングルファーザーも親が一人で子どもを育てる負担は非常に重くのしかかり、子どもにも親にも強いストレスがかかっていることがうかがえた。シングルファーザーの場合も母親がいるときより収入が低くなり、経済的・精神的に余裕がなくて子どもの心やからだに配慮することができなくなると、子どもにストレスがかかる。一方、祖父母が子どもをみているケースなど、父親に家事・育児の負担があまり重くなく、経済的・精神的にゆとりがある場合は、逆に子にどもが過保護になったり、父親が役割を果たさなくなっている。

一般的に日本の子どもは、人間関係の発達が一五歳になっても他の国々の子どもたちと比べて遅れているという、家庭教育に関する国際比較のデータがある（ヨーロッパ、アメリカ、アジアの国々との比較）。日常生活を自分ですることや社会的な活動が非常に弱いことが明らかにされている。こうした一般状況の中にあって、シングルマザー、シングルファーザーが家庭の中で子どもとなかなかコミュニケーションがとりにくい状況がある。

アメリカと日本を比較すると、日本のシングルマザー・ファーザーは地域の中で非常に孤立していることが多い。アメリカでは教会や民族内のグループなどで多様な支援を受けている。社会全体が多様な家族を受け入れており、その中で子どもたちが大人たちや社会に守られながら育っていると感じる。日本にもそのようなシステムが必要である。

一人しかいない親との関係の中で子どもが育つとなる

と、その親に受け止められなければ子どもは暮らしていけなくなる。一人親とその子どもたちに大人の支援を複数つけることによって、現代日本では両親家庭であっても子どもたちに得にくい社会性などを育てることが可能になると思う。

これまで日本では「夫婦と子ども」という典型的家族への思い入れが強く、一人親の家族は特別な家庭であり、親にとっても子どもにとっても不幸なことであると考えられてきた。しかし、こうした家族は地域社会の中で増加しており、どのような家族形態であっても、地域で受け止め、社会の子どもとして子どもたちの育ちを保障するという視点が非常に重要だ。一人親と子のストレスを地域社会や大人たちがどのように取り除くことができるかが今後の重要なテーマである。

補足しておきたいこと

日本より少なくとも一世紀早く核家族化、少子化を経験し、七〇年代以降とくに「脱結婚化」という新しいカップル・家族形態への変化を体験しつつあるフランスの現状を知り、日本の状況とつきあわせることは意味のあることだと思う。その作業を通して二一世紀の「カップルのゆくえ」を展望することは、男女平等社会の実現や高齢社会の到来を見据えて、一人ひとりの幸せにとってどのような社会・経済システムが必要かを探ることにつながるからだ。

テブノー報告と森田報告をみると、日本とフランスでは異なる点も多いが、最近の傾向としては共通点が多いことがわかる。フランスのほうがより顕著だが、離婚の増加、晩婚化、結婚数の減少などは共通した現象である。ただ日本のほうが婚姻外の出生やシングルマザーがかなり少ないのは、多様な家族形態を受け入れにくい社会通念や、多様な家族をサポートする社会システムが未整備であることによる。

テブノー報告の焦点は、両親の離婚が子どものアイデンティティの形成にどのように影響しているかということである。家庭が子どものアイデンティティ形成の場であることは日本でもいえることだが、その場合、私などが連想するのは「家庭」という漠然とした場のイメージである。しかしテブノー報告で問題となっているのは、子どものアイデンティティ形成に大きな影響を与えるのは両親のカップル関係だということなのである。

報告によると、子どもは自分という人間が発生したルー

ツとして両親の恋愛関係、性関係をとらえる。また、両親を、自分が男としてあるいは女として生きていくモデルとして受け止める。離婚が多いフランスで結婚関係に入らないカップルが増えているのは、自分たちの恋愛関係にとって結婚がベストではないと考える男女が増えていることを示している。日本では、子どもが両親を恋愛カップルととらえて男性、女性としてのモデルにするという感覚があまりないのではないか。

テブノー報告で他にわかりにくい点は、子どもが親の離婚に関して「自分たちにどのくらい責任があるか問う」というくだりだ。シンポジウムの司会者でフランスに長い棚沢直子東洋大教授によれば、フランスでは子どもの教育方針で対立して離婚するケースが少なくないのだそうだ。また、子どもはカップルが「愛の結晶」として意思的に産むもので、子どもにしてみれば両親にとっての自分の位置は気にかかるものであり、「自分のせいで離婚したのでは」という問いを発しやすい。両親が男女としては別れても、親として子どもの教育について連帯し、共同戦線を張る関係にあれば、子どもの気持ちは安定しやすいという。

ディスカッションの際にテブノーさんは次のように語っている。

「すべての子どもが父親との関係、母親との関係を持つ権利がある、と申し上げましたが、それは父親や母親の役割をする人が同じ住まいに住んでいなくてはならないということではなく、別の所にいても父親なり母親なりの役割をしてくれれば良いという意味です」

テブノー報告の基本にあるのは「離婚は乗り越えられる」というポジティブな姿勢である。ただし、無差別に「離婚は問題ない」とするのではなく、離婚によって実際にどのようなトラブルや悩みが子どもに起こっているかを洗い出し、それらの解決をはかろうとしている。離婚した事実が問題なのではなく、子どもが理解できるように親が離婚について語り、不安にさせないような態度をとることや、親にとっても子どもにとっても成長へのステップにするなど、離婚をどう生きるかが重要なのだと指摘している。

（くさの・いづみ／フリーランスライター）

特集

学校　地域　家庭

みんなちがって、みんないい

向原恵子

人権を大切にするって、どこまで？

性教育を大切だと思って、授業を作り続けて十年以上がたった。いつも、性教育は〝人権教育〟と言い続けてきたが、今年は四年生の担任。何をテーマに授業を作ろうか考えた。

四年生というこの時期に、二次性徴はどうしても教えなくてはならないテーマだった。二次性徴を教えるときに、ややもすれば体の変化と成長ばかりになりがちだが、それに伴う心の変化を取り上げることはもっと必要だと思った。大人になるにしたがって現れる、誰かを大切に思い必要とする、人としての自然な心の変化。また自分を客観的に見つめ、自分の欠点に気づき悩む心の現れ。思春期にはまだずいぶん早いかもしれないが、自分の体と心に向き合う性教育を作ってみようと思い、〈一次―月経〉〈二次―射精〉〈三次―心の成長〉〈四次―自分を守る具体的方法を知る〉と左記のように計画をたてた。

＊　＊

①人の自然な成長過程として、体と心に変化が起きることを理解する。
②両性の内性器の構造と働きについて復習する。
③月経への準備や対応（ナプキンの扱いを含む）を学ぶ。

④月経は大人への出発点として捉え、特別に母としての準備という視点はとらない。
⑤精通・射精への対処について学ぶ。
⑥両性が、共にお互いの体や心の成長について学ぶなかで共感する。
⑦体や心の成長にはたいへん個人差があることを知り、子どもたちの不安感を取りのぞく。
⑧心の変化を具体的に捉え、人には共通する部分も違う部分もあり、一人一人が個性のあるかけがえのない存在であることに気づく。
⑨自分と感性や考え方が違う人に対して、どういうふうに理解したらいいのか人権尊重の視点で考える（同性愛についても学ぶ）。
⑩子どもたちは、みな安全に自由に自分らしく生きる権利を持っていることを知らせ、それらが脅かされそうになったとき、自分を守る具体的な方法を学ぶ。

〝心の成長〟の単元の中で重要だと思ったことは、「人を好きになる」心の中に、同性愛もあることをきちんと教えることだった。同性愛の存在自体は、みな知っているどころか、「ホモ」を笑いものにするテレビ番組などで、「ホモ」＝「変態」という認識が大多数であろう。実際、わたしのクラスの子どもたちも、友だちを馬鹿にするとき「ホモ」という言葉を使うことがあった。

自分の体のことを正しく知り、自分を大切にすると共に相手を大切にする。それが性教育だから、いわゆるマジョリティー＝「異性愛」だけを教えることは、人権を制限して教えることになると思ったのだ。たとえ三％～一〇％の人たちだけが同性愛だとしても、その存在を無視して子どもたちに人権を教えることはできないと思っていた。

それは、一昨年蔦森樹さんを迎えて「男らしさ・女らしさ」の授業を行ってからずっとわたしの心の中でこだわってきたことでもあった。（We九六年六月号／四三号に授業実践掲載／編集部注）

アカーの風間孝さんをゲストに

一口に「同性愛についても正しく教える」といっても、何をどう教えたらいいのか、本当に悩んだ。「大人になっていくと、きみたちもきっと誰かを好きになるよ。それが異性とは限らない。同性の場合もあるよ」。これだけでは「ホモ」＝「変態」思考の子どもたちが納得するとは思え

なかった。またこれでは、保護者にも「うちの子を、同性愛にするのか！」と誤解を招きかねなかった。同性愛に対する偏見をどうすれば払拭できるのだろうか。毎日毎日考え続けた。なんとか子どもたちの「ホモフォビア（同性愛嫌悪）」の価値転換を図りたかった。

どんな内容なら価値のおしつけにならない授業ができるだろうか、とも考えた。昨年の「ゲイ&レズビアン国際映画祭」で上映された「ITS ELEMENTARY」（アメリカの公立学校で、同性愛を子どもたちに教えている授業の映像）がとても良かったので、それを抜粋して使ってみようかと考えた。しかし、アメリカだからできるとか、どうせ日本ではありえないからと、他人事になってしまわないかと懸念した。もう一度、蔦森さんをおよびした時のように、同性愛の方に直接来ていただいて、子どもたちを現実に向き合わせて、そうすることによって子どもたち自身が考えてみることがいちばんいいと思われた。そのためには、どんな方に来ていただくかが重要であった。風間さんとは、府中青年の家裁判の報告会で知り合い、アカーという団体で同性愛に対する偏見をなくすためのいろいろな活動をしていることがわかった。また、塾の先生をしているということで、子どもたちにも慣れているのは強みだと思った。しかし何よりも、その外見が、子どもたちの抱いているらしい「ホモ」のイメージとかけ離れていてゲストにぴったりだと思ったのだ。

同じ学年を組むYさんも、はじめは小学校に「同性愛」の人を呼ぶ必然性が良くわからないとか、保護者の理解がえられるだろうか、どういう授業になるのかイメージできないなど、私同様悩んでいた。しかし、風間さんの報告会に一緒に行って話を聞いたり、この授業が「心の成長について学ぶと共に人権について考える」ということから「同性愛」について触れる必要がある、と納得して一緒に授業内容を考えるようになった。

今回もゲストに対する謝礼は公費からは出ないので、こんなこともあろうかと昨年の性教育の実践を「ジェンダーフリーを目指す中学年の性教育」として研究論文にまとめ、研究奨励費を確保しておいた。

「心の成長」の授業

事前に、子どもたちに次のようなアンケートをとった。

①自分の良いところ・好きなところ　②自分の直したいところ　③友だちの良いところ・好きなところ　④友達の

直してほしいところ　⑤性に関することばで知っていることば　⑥エッチだと思うことば　⑦「ホモ」ということばを聞いて思うこと。

■授業の展開

（1）子どもたちとの話し合い

アンケートを集計した結果を提示して、子どもたちに意見を聞いたところ「自分で思っている短所と、友だちが直してほしいと思っていることが、ほとんど一致していた」。『足が遅い、太っている、不器用、足が短い』など、直そうと思っていても直せないことがある」ということから、「自分で直せない事はその人らしさだから、別に直そうとしなくてもいい」という意見が出てきた。

また、アンケート集計は無記名で提示したが、自分で「太っているのを直したい」と書いた子どもが、この話し合いの最中に恥ずかしくて机の下に隠れてしまっていた。けれども、この話し合いを経て、「病気になるほど太りすぎでないなら、太っているのもその人らしさで悪いことじゃない」と思うようになっていった。そこで私は子どもたちに、その子が「太っていることは悪いことだ」と思い始めたのは、「でぶ」とか「ブタ」とか言われることがあるからなのだということを付け加えて話した。そして「一人一人がみんな違うこと」「人にはいろいろな面がある（良い悪いだけではかれない）」「自分ではどうしようもないことはその人らしさでいい」ということを確認した。

（2）ゲーム

次に、握手をして頭を撫でるというゲームをした。親密でない関係で、握手をして頭を撫でられると、緊張したり、恥ずかしかったりすることを実感してみるためだった。仲がいい友だちだとうれしく楽しいけれど、あまり遊んだことがない場合は緊張したり、いやなことをされた友達だといやだったという体験を実際にしてみて、子どもたちはいちばん安心してスキンシップができるのは家族であることに気づいたようだ。

（3）家族について考えてみよう

そこで家族について考えてみた。

まず、「ひとりは家族？」と聞くと「ちがう」という答。

「犬と二人は家族？」と聞くと「いい」という答。

次に、「男と男の家族は？」と聞くと「いい」という子

どもが十六人。「だめ、気持ち悪い」と答えた子どもが十七人だった（「ホモ」だ。気持ち悪い。変態だからおかしい。子どもたちからはいろいろな意見が出た）。

（4）風間さん登場

「本を書いたり講演活動をしている人です」と風間さんを子どもたちに紹介した。「かっこいい、りりしい、しぶい、ハンサム、何でもできそう、科学者みたい、先生みたい」というのが子どもたちの風間さんに対する第一印象だった。

次に、風間さんに自己紹介をしてもらった。「自分は同性愛で、好きになる人は男の人です」という言葉に、子どもたちはとてもびっくりしたようだ。

風間さんは同性愛について次のような説明をしてくれた。ホモセクシュアル＝同性愛は少なくて、ヘテロセクシュアル＝異性愛が多いこと。ホモセクシュアルは現在では病気ではないと世界のお医者さんから認められていること。同性同士で結婚できる国が、オランダなど世界で一〇ヵ国ぐらいあること。「ホモ」という言い方は、かつて日本人が「ジャップ」とアメリカ人から馬鹿にされていたのと同じように、同性愛の人を馬鹿にする言い方なこと。

子どもたちから次々と質問がでた。

「いつからなの？」

「十八歳の時に気がついたんだよ」。

「直らないの？」

「はじめは直そうとしたこともあったけれど、自分らしさだから直さなくていいと気がついたんだ」。

「どうして男の人が好きなの？」

「好きなことに理由はないよ。ただ自然に男の人が好きなんだ」。

風間さんは、子どもたちの質問にとてもていねいに答えてくれた。風間さんがホモセクシュアルだと聞いて、はじめはびっくりしていた子どもたちも、自分の「ホモ」に対する知識が、テレビなどから得た、ホモセクシュアルを馬鹿にし笑い者にする誤った知識だったことに気づいたようだった。新しい事実を知って、どの子の顔もとても真剣だったことが、私にはとても印象深かった。

風間さんとのやりとりのあと、子どもたちに、風間さんが同性愛だと知って最初の印象と変わったかどうか聞いてみたが、「ホモ」に対する生半可なイメージなど、風間さんの圧倒的な現実の前には簡単に引っ繰り返り、子どもたちにとって風間さんは、最初のイメージ通り「かっこい

い・しぶい・りりしい」ままだった。さっきまで男同士の家族なんて気持ち悪いと言っていたことに関しても、「別にいいんじゃない」に変わっていた。

最後にある子どもが、

「いろんな人がいるんだなあ」

「ふしぎだなあ」

「世界は広いなあ」

と、感にたえないというように、ため息混じりに言った言葉でこの授業は終わった。

その後の授業

心の成長の授業のあとは、「自分を守る具体的な方法を学ぶ」をテーマに、誰かに脅かされた場合、いやなことをされそうになった場合を、U教頭と養護のSさんにも協力してもらい、寸劇にして行った。それは、地域の小学生が性被害に遇いそうになったことから、ただ「気をつけなさい」といっても、子どもたちは実際どうしたらいいのか何も知らないことに気づいたからだった。

その中でとくに強調したいことは、①いやだと感じたら、はっきりと「いやだ」と意思表示すること、②いやなことをされたり、されそうになっても、それは「あなたが悪いのではない」ということ。あなたたちには、〈自由に・安心して・自分らしく生きる権利〉があることを「子どもの権利条約」を使って知らせた。ただし、③自分を守るために、逆に相手を傷つければ、あなたが相手の権利を奪う加害者になること、も付け加えた。

そして最後は、月経・射精を学んだことで、子どもたちから「受精はどういうふうにするのか知りたい」という声があがったため、「性交」の授業を行った。

「性交」については、すでに三年生で扱ったが、今回はほぼすべての子どもから強い要望があった。保護者の同意も得て、もう一度ていねいに扱った。絵本とペープサートを使って知らせたが、そこでも具体的な方法は「自分が一番好きになった人と一緒に、自分で一番いい方法を考えられるといいね」という伝え方をした。

体やそれにかかわるさまざまなことは、たいへん個人差のあることで、「みんなちがって、みんないい」ということを伝えたかったのである。

授業を終えて

わたしの教員生活は、肢体不自由児の養護学校から始まった。その時思っていたことは、子どもたちには「障害児」も「健常児」もいないということだった。また、高い塀に囲まれた「安全で」ある種「快適な」養護学校は、隔離施設とどれほどの変わりがあるのだろうかと考えていた。

そこで普通学級の担任になって「障害児」を受け入れていこうと考えた。通級制の「障害児学級」の担任を経て、普通学級の担任になったときに「性教育」と出会った。小学校における基礎学力の獲得はもちろん一番大切である。しかし自分の体や心についてきちんと知ることは、それにもまして人としてどう生きていくのかを考える、大切な基礎になると思い、「性教育」を続けてきた。ひとつの授業を作るたびに、子どもたちの疑問に答えるごとに、またわからないことが増え、自分の生き方を問われてきたような気がする。そして、そこをなんとか突破しようと、また次の授業に挑戦して、あっという間に今日に至った。

「性教育」はたいへん間口も奥行きも広い領域である。しかし小学校の段階では体の構造と機能、そして性交と心の成長の領域を押さえておけば、あとは、エイズにしてもその他のことに関してしても、何でもバリエーションとして授業化は可能なのではないだろうか。そしてわたしにとっては、今回の授業で「性教育」のある到達点が見えたような気がしている（もちろん、まだまだ挑戦するべき内容はたくさんあると思うが、わたしにとっては一段落ついたような気がしている）。

今年度、わたしは図工専科として授業を作ることになった。また新しい出発だ。担任としての学級経営は、自分がテーマを持ち、研究を積めば、たいていのことは子どもたちと共に実現できる。その面白さとやりがいは、何ものにもかえがたい喜びである。しかし、国・算・社・理には教科の枠組みに捉えられた、教えねばならない・採点し序列化しなければならない日常がある。子どもたち一人一人が、それぞれ固有の価値があると思っていても、実際は、できる・できないで子どもたちを見てしまう。そのことから一歩離れてみたくなったのである。

表現の世界で、一人一人の子どもたちと向き合って、本当に一人一人が自分らしさそのままに評価される授業を作り出したいと思った。そんななかで、あるいは新たな「性教育」もできるかもしれない……。

（むこうはら・けいこ／東糀谷小学校）

家庭科

風がかわる匂いがかわる

「自分」探し――家族の中の自分をみつめて

分校　淑子

家族の授業は、私自身最も興味があり、大切にしている領域だ。今回は、昨年の本誌八・九月号と十月号で紹介させていただいた〈「自分」探し〉の続編として、家族の授業を位置づけてみた。

＊　＊　＊

一年半ほど前、金沢大学の綿引伴子先生から、授業で取り入れてみてはと、アダルト・チルドレン（以下AC）や早期教育についての本を紹介していただいた。そこに描かれていたのは「常に子どもに目を向ける教育熱心な母親と、その愛情と期待に応えた優等生」の姿だった。これは、所謂理想的な母子であり、実は本校の多くの生徒の現実でもあった。

私の家族の授業の目的は、「近代家族」を相対化してみることと、ポスト「近代家族」に目を向けさせることだ。そしてその中核には常に「性別役割分業」の揺らぎを位置づけてきた。しかし、ACや早期教育は、その背景に当然「性別役割分業」はあるものの、直結しているのは「母の愛」や「家族愛」だ。高校生を前に「愛」を懐疑するのは至難の業だ。しかもACや早期教育はあまりにも本校の生徒にぴったりし過ぎていて、それに気がついた後の生徒たちの心情を思うと、正直怖かった。情緒面はプライバシーに関わるから、という大義名分を隠れ蓑に、私ははじめ二

の足を踏んだ。

しかし、考えれば考えるほど、この問題は、目の前の生徒の一番の問題であり、ここ最近の青少年犯罪のキーワードとも言える「普通の子が……、きちんとした家庭の子がなぜ……?」という問いにもつながるように思えた。

そして、試行錯誤の結果、私は思い切って生徒たちにそのままぶつけてみようと思った。

授業展開

授業は、生徒の研究・発表を中心にした。授業全体の流れは、左記の通りである。

●授業内容（二年次・一学期後半～二学期）

①現代の家族の諸現象　［1時間］

②家族の諸現象（＝テーマ例）の紹介

③グループ（個人）研究　［5時間］＋夏季休暇

テーマ・グループの決定と研究

④グループ（個人）発表　［12～15時間］

テーマの説明と考察（主張）の発表

⑤現代家族と本単元全体の総括　［1時間］

「自分」探しと「近代家族」概念

●テーマ例

（a）児童虐待（b）早期教育（c）AC

（d）「仮面の家」（e）結婚しないかもしれない症候群

（f）民法改正（g）専業主夫（h）過労死

（i）DINKS・DEWKS（j）性別役割分業

（k）離婚率上昇（l）高齢化（m）母性（n）少子化

（o）子ども中心主義（p）生殖革命（q）家族愛

（r）ファミリィ・アイデンティティ　等々

研究というのはやはり、取りかかるまでは気が重いものだ。テーマ例の厳選、紹介の仕方の工夫をはじめ、手持ちの本をテーマ別にリスト・アップし、その場で貸し出し可能のミニ図書館を作ったり、学年中のテーマや進行状況を小まめにプリントしたりと、かなり私なりに頑張ってはみた。それでも私はあくまで裏方、主役の彼らがその気になるかどうかは彼ら次第。さてどう出るかはお楽しみ……と言いたいところだが、二年の二学期は、彼らがメインで記念祭を実行、その後は受験モードにスイッチオンという時期。おざなりな発表の連続かもしれないと、実は覚悟していた。

発表時間は、質疑応答の時間を含め一グループ四十分（これは、はじめ「長すぎる!」との声が多かったが、やって

みると「時間が足りない！」に変わっていた）。

発表内容には、テーマとなった事柄について基本的な説明は当然必要だが、その後必ず自分自身の意見を言うこと、自分の価値観をきちんと示すことを注文した。

発表方法は、視聴覚機器の使用はもちろん劇や公開ディベート等なんでもOKだ。発表ごとには、特に個人的に聞いてきた場合を除いて、あえて私からのコメントは入れなかった。その代わり、視聴していた生徒が発表に関して意見・感想を書き、私が集めて目を通した後、名前の部分をはずして発表者に渡した。これが、なかなかシビアでかつ的を得ていた。また、発表者へのメッセージも含まれていて、教師の評価よりも遥かに効き目があったし、皆励みにしたり楽しみにもしていた。だから、発表は回を重ねるごとに確実に良くなっていった。

発表例から

テーマで多かったものは、ジョンベネちゃん殺害事件の影響もあって「児童虐待」や、自分に思い当る節があったのだろう「AC」や「早期教育」、ショッキングな事件（一九九二年に浦和市で起きた高校教師とその妻による息子殺害事件）を横川和夫さんが追跡ルポした「仮面の家」などであった。

あるクラスでは、私生活が派手で学校では浮いてしまい、保健室登校が目立ってきたAさんが一人で「仮面の家」をテーマに、両親に殺された息子になぞって自分自身を語った。「普通は家が一番落ち着くというのに、私は家が一番緊張し、神経を使う場所だった。小学生の頃から、勉強ができるということが親の子どもである証しのように思えた。裏を返せばできなかったら捨てられてしまうという脅迫観念さえあった。親を殴る子どもは、親が嫌いなんじゃなくて、逆に親が好きだから、本当の自分を受け止めて欲しくて、必死にSOSのサインを暴力という形で表しているのに……」と涙ながらに語った。クラスメイトからの彼女へのメッセージは、用紙に書ききれないくらいびっしりと書かれていた。彼女の内から湧き出る発表に心を動かされたのだろう。中には、自分自身をはっきりと表現できることや涙を流せることを、つまり正直に感情を表現できることを、羨ましいと書かれたものも多かった。そして、各人が自分自身の悩みや辛さを正直に書いてもいた。そこには親から裏切られて傷ついていること、家族の仲が悪く家が辛い場所であること、いじめにあった経験から、人を信じられないだけではなく自分自身も好きになれず苦しんで

いること等、普段の姿からは想像もできない一人一人の素顔があった。彼女のカミングアウトはみんなのカミングアウトを引き起こした。……今も、彼女は様々な形でSOSを発し続けている。彼女を見ていると、本当に愛情を欲しがっているように感じる。十七年間の蓄積を解くには、やはり多くの時間が必要なのだろう。

男子二名、女子三名で「AC」を研究したグループは、劇で、一見理想的な中学生の娘と母親の関係を演じた後、その娘が成人し次のように自問自答している場面を演じた。「何の不自由もない生活。誰もが認める素敵な恋人もいるし、会社でもしっかりやっている。お母さんも私を誇りに思ってくれている。私自身、特に不満があるわけではない。なのに、この満たされない思いはいったい何なの?」

劇の後、「親の理想をいつも与えられ続け、いつも心のなかに親がいて、自我を出せぬまま、自我を持てぬまま大人になった真面目なよい子が日本におけるACだ」と彼らなりに定義した。その上で、一人一人が考察を言いはじめた。ここではそのうち二人の考察を紹介したい。

B君。「僕の家は、僕で六代続く家業を営んでいる。僕は小さい時からお客さんに『六代目』と呼ばれてきた。高校に入った頃からそのことに疑問をもって悩んできた。きっと皆もこの学校に入ってきたからには親の期待がかかっているだろうし、もし今気づかなくても、きっと将来僕のように悩むことがあるだろう。その時ACという『癒し』を覚えておくだけでもずっと楽だと思う」。

Cさん。「私はそんなに『よい子』ではないけれど、やはり自分をACだと思います。そして、少し乱暴だけどこの学校の皆がやっぱりACだと思います。『勉強するのは自分のため』というのは、親の、そしてこの日本中の価値観です。だから、日本中がACなんだと思います。だから勉強するなとも、どうしろとも言えないけれど、ただ、ACは決して他人ごとじゃなく、私たち自身の問題だということだけは、言いたいんです」。

以上で発表は終わった。

「一人一人の主張が、心に響いた。すごい発表だった」「劇を見て、あっ、自分の家の様子とそっくりだと思った。ダイレクトに自分の意識に飛び込んできたような気がする」「多分、自分はACだ。自分の将来の夢は、実は親の意志だということだ。でも、それを認めてしまうのは、自分自身というものがないことを認めるようで恐怖だ」など、さまざまな感想が集まった。

Cさんの言う通り、親の期待に縛られつつ、本当の自分

とのギャップに気づき、もがくAさんも、彼らの発表に共感した生徒たちも、おそらく皆ACなのだろう。

ACは、何でも親のせいにする危険思想と言う声もある。確かに、私自身AC関連の本を読む中で何となく疑問に感じたことであった。ただ、彼らの主張からは、単に親のせいにして責任のがれをしようとしている様子など微塵も感じることはなかったし、彼ら自身そんなつもりもなかっただろう。自分を必死で探す上で、決して無視しては通ることのできなかった大きな壁、それが親の存在であり価値観であり、その親と自分の関係を問うことこそが、自分をみつめることだったのだろう。

授業後、ある生徒が「親が子に期待することなど昔からあっただろうに、どうして今こんなに問題となっているんだろう?」と聞いてきた。その通りだ。親と自分の価値観の違いに気づき、葛藤し、やがて精神的な親殺しをして自分を確立していく……それを思春期といってきたはずだ。その親殺しができないところに「近代社会」のそして「近代家族」の落し穴がある。

授業の総括

戦後急速に進んだサラリーマン化は、仕事と家庭を分断し、性別役割分業が確立した。一方、新憲法によって、イエ中心の家族観にも変化が起こる。両者は若い夫婦を独立させ、家族の意味は愛情で結ばれた婚姻関係と、血縁にもとづく愛情に集約された。「父親は、家族のために一所懸命働き、母親もまた、家族のために家事と育児に専念する。その愛の中ですくすくと育っていく子どもたち」という「近代家族」が成立した。はじめは、一見理想的に見えたに違いない。しかし、いつのまにか父親は競争社会の申し子として企業戦士化する。母親の目は全て一～二人の子に注がれ、社会全体の価値観である高学歴にむけて教育に専念し、自分の敷いたレールを歩む「よい子」を育てあげようとする。どちらも、子どもにとってよかれと思って……という「親の愛」という名のもとにだ。

前述のように、「近代家族」における家族の意味は、婚姻と血縁を背景にした「愛情」にある。だから、子どもも親の愛の前には自分を殺してでも従おうとするし、逆に少しでも愛が少ないと感じれば、自分の家はおかしい、自分はこの上なく不幸だと思い込んでしまう。もちろん、家族の愛は決して否定するものではないが、求められすぎるが故に、逆に親も子も「家族愛」に支配されてしまっているのではないだろうか。早期教育も、児童虐待も、ACも、

「仮面の家」も……みんなみんな根っこでつながっている。

あなたたちは、家族の中の自分をみつめることを通して「自分」探しをすると同時に「近代」そして「近代家族」というものも学んできた。今は時代の転換期であり、あなたたちは、また新しい価値観を築いていく世代でもあるのだ。……最後の授業でこれらのことを伝えた。

たった二十分程度の短い私の出番だったけど、「先生の最後の話を聞いて、あ、そっか、と今迄の発表が全部つながってくるのがわかった。きっと無意識のうちに『近代家族』を感じていたのかもしれない」という感想に表れるように、一つのテーマを深く掘り下げて考えた生徒には、ちょっとの説明でその全貌がパッと開けて見えたのだろう。

また、「この授業には驚かされっぱなしだった。言い換えれば、本当に沢山のことを学べたということだ。自分がパワーアップしたように思えた」のような心強い感想もあった。

しかし、「自分の中で、信じていたものが、がらがらと崩れてしまった。もう、私の心の中に触れないで、っていうのが本音です」というような感想も少なからずあった。

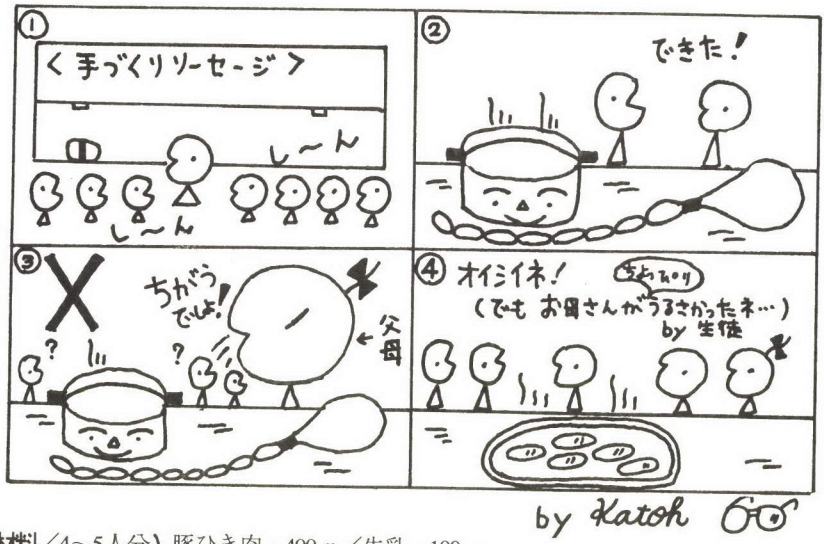
実は、この言葉が胸に痛くて、やってよかったという思いともうやめようという思いが交錯している。ただ、この授業を通して、一見真面目で優等生の生徒たちの心にも、たくさんの、納めてはおけないほどの思いが蓄まっていること、それを吐き出すことも一つの「癒し」であることを実感したのは確かだ。

そして、私の今までの家族の授業のコンセプトだった『性別役割分業』を追求していった先に、近代家族概念が見え、ポスト近代家族への模索が始まる」という、はじめに「性別役割分業」ありき、の公式は、実は私が生徒より上の世代であり、親の立場であり、何より「性別役割分業」が自分にとって一番大きな問題であったから成り立つことではなかったかと思えてきた。

生徒たちにとっては、一番の聖域であり実は大きな束縛となっている「家族愛」こそが近代家族の砦であり、それを自分なりにしっかり咀嚼してみる中で「性別役割分業」や「近代家族」を疑うきっかけにも出会うのかもしれない。

私事ながら、最近、育休明けから保育園に通う自分の子どもの育ち方を、単に「親の生き方に合わせた」だけでなく、「子どもにとって良かった」と心から思えるようになった。……私自身も「自分」探しをしていたようだ。

（ぶんこう・としこ／金沢大学教育学部附属高等学校）



（材料／4～5人分）豚ひき肉・400ｇ／牛乳・100cc
砂糖・小さじ1／塩・小さじ1／片栗粉・大さじ1／／羊腸・1m
ソーセージスパイス・小さじ1／パセリ(みじん切り)・大さじ1～2

＊その他（これらは東急ハンズ（各店）で扱っています）。
◎口金・絞り袋セット（1セット1500円）
◎ソーセージスパイス（1つ400円ぐらい）
いろんなスパイスが混ぜてあって便利。おいしくできます。
◎羊腸（1ケ10m：500円ぐらい）塩づけが保存もきき、つくりやすくていいです。

（つくり方）　＊Ｗｅの会の鈴木淑子さんに教えてもらったやり方です。
①材料をすり鉢に入れ、手にビニール手ぶくろをして、よく練る。
（この時、牛乳を少しずつ入れる）
②口金と絞り袋をセットして、口金の先に羊腸をはめこみ、全部（1m）を
いったん口金にたぐりよせる。
③羊腸の先をたぐりよせてから結ぶ。
④絞り袋の中に、材料をつめ、絞りながら、腸の中へつめていく。
⑤4cm～5cmごとに、腸をくるくるねじらせて、交互に重ねていく。
（この時、腸と腸の境目を一か所ずつたこ糸で結んでいく）
⑥羊腸の最後の部分をまた結ぶ。
⑦　⑥をナベの中に入れ、15分くらいボイル（ゆでる）する。
⑧　フライパンに油を少しひいて、⑦を転がしながらゆっくり5～6分加熱する。
（表面にうっすらこげめがつくくらい）
⑨出来上がり！おいしいですよ！！
（そのままでもＯＫ、ケチャップやマスタードをつけてもオイシイです）

＊前回（4月号）の「タマゴ立て」の出典は月刊「たのしい授業」（仮説社）です。
書き忘れてしまいました。スミマセンでした。

楽市楽座

加藤昭仁

〈ソーセージづくり〉

うちの学校では、入試の科目に「授業を受けて感想文を書く」というのがあります。今年は僕がその担当になり、中学校の受験生相手に、〈ソーセージづくり〉の実習授業をやってみました。

入試ということもあって、最初ジョークを交えながら、つくり方を説明していっても、ニコリともせず、シーンとしていた受験生たちも、グループに分かれて自分たちでつくりはじめると、本物の羊腸の気持ち悪さに（？）驚いたり、ひき肉を羊腸につめていく時の感触に大騒ぎとなりました。

「参観してる父母の方も、教室をまわって見てもらって結構ですよ」なんて、僕が余計（？）なこと言ったものだから、皆さん積極的に参加してくれて、「それはこうやんのよ。も～」なんて、子どもたちにアドバイスをしてくれる父母や、中には口だけじゃなく、「貸してごらん」なんて、自分でやり出す父母の方もいたりして。オイオイこれは一応「入試」なんだゾー。

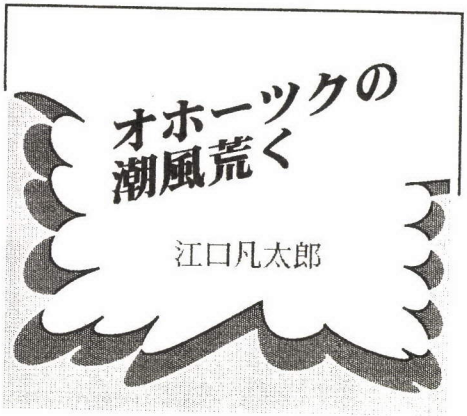
途中、羊腸が破れて、中から肉が飛び出してきたり、羊腸に空気が入って、パンパンに膨らんでしまったり……と、ハプニングも続出で、子どもたち結構苦労していたようでしたが、出来上がったソーセージを食べる頃には、みなさん（とくに父母？）ニンマリでした。

感想文にも、「ふだん見られないような羊腸が見られてよかった。試験なんて忘れて楽しくつくれた。班の人も楽しいし、いい雰囲気でつくれた。だからソーセージも２倍うまかった」なんて書いてありました。

３年前、羊腸の替わりにアルミホイルを使って簡単な方法でやった時には、「何コレ？棒状のハンバーグみたい。こんなのなんのために作ったの？」と、子どもたちから不評だったソーセージづくり。やっぱり手を抜かず、ちゃんと本格的な材料（スパイスも）をそろえた実習では、子どもたちの反応もこんなに違い、またものづくりが、初対面の人と人とをも自然と結びつける働きをすることを再確認したカトーでした。

(かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭)

◎このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからの〃掘り出し物〃（教材や教具、本、ビデオなど）をお待ちしています。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局：加藤昭仁までお便り下さい。（〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869）



新採の時に先輩から受けたアドバイスのひとつが、「生徒にお金を貸してはいけない」ということでした。

まったくその通りだと思うのですが、過去に一度だけ生徒にお金を貸したことがあります。

担任を持っていた時のことです。

就職活動で、A子は企業が開く体験入社や会社見学に参加を希望していました。ところが、A子が参加する前日、母親から電話がきました。「家庭の事情で交通費等の都合がつかないので参加できません。A子も納得済みです」とのことでした。

すぐに、A子本人を学校に呼び話を聞きました。泣きながら「本当は行きたい」と話していました。納得していないA子に私はいくらかのお金を渡し、「あなたを信頼して、A子自身に貸す。将来勤めてから返してくれればいい」と話しました。保護者には「ぜひ、行かせてほしい」と私からも頼みました。

A子は会社見学から満足して戻り、その会社に応募しました。ところが、A子はその会社から内定通知をもらえませんでした。

「よけいなことをしなければ……」考えてもしかたのないことですが、残念で悔しい思いをしました。

A子は結局、卒業して市内のお店に就職しました。

四月、はじめてもらう賃金から貸した金額の1／3を送ってきました。返事には、無理せず、少しずつでも返してくれるように書きました。

それから二年あまり、先日、残りのお金と手紙が送られてきました。

借りた本人が、一番つらい思いをしていたのだと思います。A子にとって、借りたお金は結果的にあまりプラスにならなかったのに、返すお金は、厳しい中から二年かかってやっと返すことになってしまった。

私としては、「信頼して」と口では言ってみたものの、卒業してからも、そこまでの人間関係をつくっている自信がなかったので、卒業して時間がたっても、A子が私とのことを大切にしてくれたことが救いでした。

（えぐち・ぽんたろう／紋別南高校家庭科）

■連載

おんなが歳をとるということ

木村栄

人生八〇年となれば、働いて子を育てて終わりというわけには行かず、それからの二〇年をどう生きるかが問題になる。新しい老いの価値や力の発見が必要だ。その辺り、『月間ちくま』に連載中の赤瀬川原平氏のエッセイ「老人力のあけぼの」が面白い。老人の心身の衰えを年をとることでつく力と読み替えて、元気を出そうというのである。

例えば野球。九回の裏二死満塁一打逆転のチャンス。緊張するバッターに「力を抜いて行け」と監督が助言する。だが、力をつけてやっとプロ選手になった若者が突然力を抜けと言われてもできるわけがない。力を抜くには抜く力がいるもので、老人になれば自然に老人力がついて力が抜ける。若い間は意識して老人力を先取りしなければならず、こんな場面でうまく力を抜いて走者一掃の三塁打を打てるのは、老人力をつけた選手だというのである。

覚えることは努力でできるが忘れることは努力ではムリ。忘れられずに苦しむことも、物忘れが進めば簡単に解決する。アレコレの代名詞だけで話が通じる。それもこれも老人力の賜物だ。

私も一つ発見した。灰色受容力というのはどうだろう。

友人の集まりでガン告知が話題になり、この機会に皆の本音を聞いておこうということになったのだが、私は迷いに迷って結論が出せない。死の宣告に耐えられる自信がないのである。

そんな時、八〇代の知人が胃の手術をすると聞いた。本人は「先生はポリープだと言ってるけど、まあガンだわね」と笑っている。そう、これ。こういう納得の仕方が老人力なのだ。

若い時は白黒はっきりさせないと気が済まない。だが、物事には白黒つけ難いこともあるし、つけない方がよい場合もある。右から左へと片付かずに、宙ぶらりんのまま引き摺っていかねばならないこともある。経験を積んで老人力がつけば（感受性が鈍れば）、敢えて白黒つけずに灰色のまま受け入れることができるようになるのだ。

私もこれで行こう、と決めた。え、いざとなったら老人力が未熟で、宙吊りの苦悩に身を焼くかも、って？

シネマの魔

武田秀夫

●「沈黙の女」について（承前）

「子供会の廃品回収でーす」

四月初めの日曜の朝、花粉症で寝足りないままうつらうつらしていたのだが、軽トラの荷台に乗って得意満面、マイクを握って叫んでいる子どもたちの姿が目に浮かび、よし！とはねおきた。

（資源を守るという名分は名分として、日曜の朝の廃品回収というのは、子供たちにとって、なによりもまずは心浮き立つ遊び事なのだろうなあ）

溜まった新聞紙やダンボールを運び出しながら、僕の内には子供たちの心の弾みに感応するものがあった。

（しかし、「沈黙の女」の廃品回収、あれはまた教会に参集する村の御婦人連にとって、貧者救済の慈善事業という体裁を表向きはとっているが実際はそれとは別の鼻持ちならない何かがあることを、クロード・シャブロルは皮肉たっぷりに描いていたっけ）

沈黙の女ソフィと友人のジャンヌが教会の廃品回収なるものの偽善を痛烈に暴くシーンを思い出し、僕はにやりと別の笑いを笑った。

「仕事はよくやるけど手紙も電話もこない。友達付き合いは謎だよ」と主人のルリエーブル氏に首をかしげさせた召使のソフィが、村にやってきて知り合った唯一の友達、それが郵便局に勤める若い女、ジャンヌ。そのジャンヌが目を生き生きと輝かせ、スカート一杯にきのこを採って林の中から現れるシーンが僕は好きだ。ルリエーブルの娘ミリンダの誕生パーティの日に屋敷から抜け出したソフィをジャンヌが待ち受けて、採り立てのきのこをいため、パンとワインでささやかにソフィの誕生日を祝うのだが、同じ日に生を享けた二人の娘のなんと対照的な誕生日の祝われ方、祝い方だろう。ミリンダの誕生パーティのような招待

客、贈り物、音楽、そして気取った会話はないが、採り立てのきのこはさぞや香ばしく、その朝買ったばかりのパンはさぞワインをよくひきたてたことだろうと、僕は貧しい二人の女の午餐に祝福をおくりたくなった。

「二十歳が最良の歳とは誰にも言わせない」

「ポール・ニザンだ」

「善人ほど内面に汚れた部分を持つ。とりわけあらゆる悪徳を。ニーチェはそう言った」

ミリンダのパーティでかわされるそんなしゃらくさい会話は、きのことパンとワインの食卓にはふさわしくない。

「知ってるわ、ジャンヌ。あなたが幼い娘を殺した話」

「自分でやけどしたのよ。裁判官が証明できないって言ったわ」

こうした会話こそが、貧しくとも実質的な食卓にはふさわしいのだ。

ジャンヌはかつて妊娠して男に捨てられたが、自分の意思で子どもを生んだ。ところが冬のある日、荷物をかかえて家に帰ると何かが足にさわった、それを無意識に蹴飛ばし荷物を置いて隣の部屋から戻ると、四歳の娘が燃えさかるストーブのそばに倒れていた——。

「母親がわが子を殺すなんてありうる？異常よ」

そう言いながらジャンヌは、「私も知ってるわ。これ、あんたでしょ」と新聞の切り抜きを取り出し、ソフィの怖るべき過去を明らかにするのだが、その場合も、

「ああ、アイス食べる？　冷蔵庫の上よ」

「冷たくておいしいわ」

といった会話を平然とおりまぜながらなのだから、そのさりげなさに僕などは大いにしびれてしまう。

「あんた、読む？」

もちろんソフィは新聞を見ようともしない。

「読んでよ」

「じゃ、私が読むわね」

寝たきりの老人ボンノム氏が娘の留守中放火によって殺されたが、犯人は依然不明。娘は無罪とされたが、不動産関係者によって、家が焼失すれば新築できると示唆された可能性がある——。

「これ、あんたでしょ。姓はボンノムね」

ベッドに足を投げ出しソフィをみつめるジャンヌの笑顔はぞくっとするほど魅力的だ。

「ああ、お皿は後で片づけるわ。……ねえ、殺したの？」

みつめられてソフィは同じベッドに倒れこみ、「証明できなかったわ」とジャンヌの身体をくすくすと笑いながら

くすぐる。このあたりも、人のミチに外れることを話しているのに妙に幸福な気分が画面に溢れて、僕をすっかりうれしくさせてくれる。

ひとしきりふざけ合ったあとでジャンヌは立ち上がる。

「さて、善行を施しに行くわよ。変身しなくちゃ」

教会へボランティアとして出かけ、廃品回収した古着の整理を殊勝らしく手伝おうというのだ。

出かけた教会でジャンヌは穴のあいたセーターから手を突き出しながら「けっこうな慈善ね」とあざけり「神父さんはオシッコくさいわ」とささやくと、ソフィは「私のお父さんと同じね」とドキッとするようなことを言うのだが、ここで、「母親がわが子を殺すなんて異常」と思う、根は善良で「正常」なジャンヌ—実際に子どもを殺していないらしいジャンヌと、オシッコくさい父親をどうやらたしかに殺したらしい「異常」なソフィと、すっかり意気投合したかにみえる二人の女の間に微妙にして決定的な亀裂のあることが示され、ラストのドンデン返しへと巧妙に伏線が張られるのである。

さて、少々先走りすぎたので話をもどすが、別の日に地域の家庭を廃品回収して回ったジャンヌは払い出された古着を次々と「ウワァ、臭い！」「こんなもの捨てちゃえ！」とほうり投げ、あまりのことに目をまるくして口もきけないでいる「善良」そうな老夫婦にむかって「こんどはもっとましな物を寄越しな！」とののしり、大笑いしてソフィと出ていく。

つまり、クロード・シャブロルは、謎の女ソフィの「怪物性」が徐々に迫り出してくる完璧なスリラー映画としての装いを「沈黙の女」にもたせながら、その裏で、フランスの社会の隅々に根を張るさまざまな「偽善」を容赦なく暴くというもうひとつの意図を執拗につらぬいているのだ。

オシッコくさい神父はジャンヌとソフィの振舞いに激怒して「もう来なくていい」とエラそうに彼女たちを追い出すが、そのかげで、ボランティアのリーダーとして教会に奉仕するとりすました婦人と密通し、教会員は教会員で、「慈善」の美衣をまといつつ、その実、穴のあいた古着を貧者に押しつけて善行を施した気でいる。そして、そうした教区をひかえた村の地主としてのルリエーブル一家の「偽善」となると、これはさすがにソフィストケイトされていて、その鼻持ちならない臭気は、機知に富んだ（と評する者もいないわけではないだろう）会話や、親子四人がオペラ「ドン・ジョバンニ」を食後に仲良く鑑賞しながら歌手がどうの指揮者がどうのと批評し合う「高尚な趣味」という香水にまぶされ隠蔽されているわけだが、それも、

ガムをクチャクチャやりながら郵便局の勤務中にセリーヌの『夜の果ての旅』を読んだりするジャンヌにかかると、「ルリエーブルなんて自分の下着まで人に洗わせ娘からはファシスト呼ばわりされ前の妻は自殺し、後妻のカトリーヌは娼婦あがりで画廊を経営なんて言ってるけど裏で客をとっている、つまりは、ニーチェの言う、〈内面にあらゆる悪徳を隠しもつ善人〉どもにほかならない」とボロクソなのである。

そうした中にあって娘のミリンダだけはましな人間にみえる。

「メイドなんて言い方、差別よ」と父親を批判し、ソフィにむかっては「仕事、つらくない？ 無理なことはする必要ないのよ」と同情的に接する。だが、この「同情」こそ、差別の卵を温めこれを孵化する最も質の悪い孵卵器なのだ。ミリンダは自分が下層の人間に同情のある進歩的な人間だと信じて疑わない。だからジャンヌのポンコツの車が故障すれば快く修理してやる。だが、そのあとすぐに「何か拭くものない？」と、ジャンヌの差し出すハンカチで平然と自分の汚れた手を拭く。所詮はそういう人間なのだ。そんな人間に、筋金入りの被差別者ソフィが騙されるわけがない。ソフィの字が読めないことをついに知ったミリンダは一瞬たじろぎ、だがすぐに「早く言ってくれればよかったのに。私が教えてあげる」と援助を申し出るが、その顔に向かってソフィは、「誰かにしゃべったら、あんたが妊娠していることをバラすよ」と凄み、蒼ざめるミリンダに、「あんたが悪いんだよ。首をつっこんだから」と止めをさす。

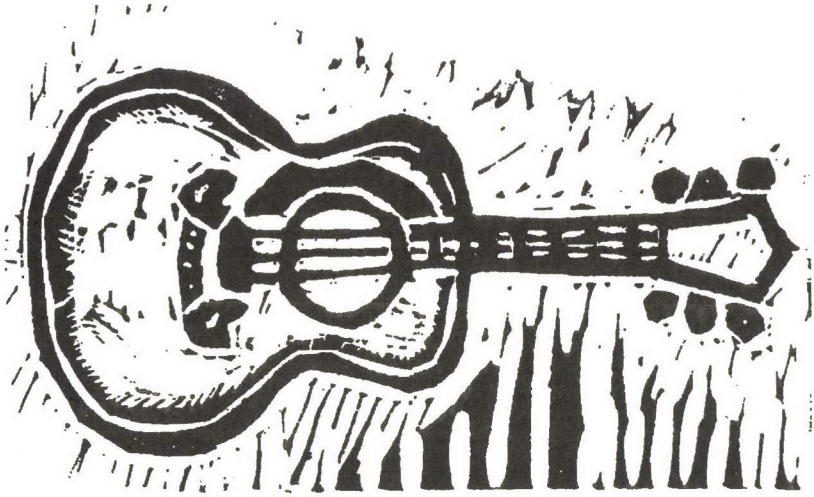
かくして映画はソフィとジャンヌによる一家四人惨殺へとなだれこむのだが、「やったね」「上出来ね」と言葉をかわしたのち、「あとはうまくやるのよ」と手を振って夜の闇の中を去って行くジャンヌにむかって、見送るソフィは手を振り返さず、使用した二丁の銃のうち、自分の使ったものだけ指紋を拭き取り、ジャンヌの銃はそのままにして罪を彼女に着せようとする。字の読めるジャンヌは、ソフィにとって、所詮は敵でしかなかったのである。

カトリーヌが置いた用事のメモの字が読めずに必死に手引き書を繰り、絶望して机に突っ伏すソフィの哀れな姿。重い沈黙の仮面の奥に秘匿された彼女の柔らかな心を一瞬露呈させただ一度のその姿が、観終わったぼくの心に強く残った。

あのジャンヌさえも立ち入ることのできなかった沈黙の女ソフィの心の奥処に、だれかが、何かが、優しく招待される期ははたしていつ、どのようにしておとずれるのだろうか。

（たけだ・ひでお／霞塾主宰）

いきいきぐんぱ　桑田良斎



子どもの時の遊びでおもいだすのがプラモデルづくりだ。『おっさん』（著者）は、当時の子どもの中でも、特にプラモデル狂であった。能勢の田舎の小さな町にも模型屋が一軒あった。小遣いを持って自転車をこいで行ったが種類がそうたくさんあるわけではなかった。

当時、祖母（7年前になくなった）が、池田（人口10万人の町、能勢から車で1時間くらいのところ）で、叔母の印刷屋と一緒に「たばこや」を開いていた。よく遊びに行き、田舎の子どものわりには都会の味を知っていたように思う。

路地裏の匂い、銭湯の風景、たこやき屋のソースのにおい、お好み焼き屋の青海苔とかつおぶしの入れ物、商店街の風景などがたまらなく好きだった。

特に強烈に魅力的だったのがプラモデル屋だ！

当時「コンドル」と「西田模型店」（「コンドル」は今でもあるが、プラモデルは少なくなった）というプラモデル屋があった。春・夏・冬休みに必ず叔母の家に遊びに行った（年の近い従兄弟が3人いたせいもある）。祖母が久しぶりに会う孫にかわいさ余ってか、必ず小遣いをくれた。その小遣いを持って目指すは、「コンドル」と「西田模型店」だ。

ここは、能勢の田舎の模型屋と違って種類がいっぱいだ。戦艦・潜水艦・戦闘機・戦車・装甲車など、のどから手がでるほど欲しいものばかりだ。おまけにモーター（模型にはめ込む小型モーターのこと。15〈いちごう〉・25・35とよんでいた）やラッカーもたくさんある。

よだれたらたらの世界である。

一番強烈にひかれたのが、戦艦大和である。

あの何ともいえないカッコ良さ、重厚感、カリスマ性、完成された創造物など、子どもごころを揺さぶられた。そして子どもなりに「大和」の歴史を調べた。

今は、全て戦争が悪い、平和教育のオンパレードであるが、「大和」の美しさは、どうだ。確かに殺しあいは悪いが、人間が作った製作物としての「大和」を評価してもいいのではないか。人間の歴史と言っても四大文明に始まる「人間が一番えらい」という考え方のもとに数千年、自然を破壊し人間同士殺戮を繰り返し続けているのではないか。

プラモデルの世界の兵器が子ども（たいてい男の子）の心を揺さぶるのは本当だ。『おっさん』は、戦闘機も好きであった。特に零戦には、まいった。

零戦といっても23型・52型などいろいろあった。

プラモデルを通して、戦争のことを知るのである。イギリスのロッキードP38・サンダーボルト、ドイツのメッサーシュミット、アメリカのコルセア・ムスタングなどを作ることにより、いつの戦争で使われたのかを知るのである。

また、当時「戦記コミック」がはやっていた。

『零戦隼人』『零戦レッド』『紫電改の鷹』などが好きであった。

影響されて、ラッカーを買い込んで、完成した戦闘機に色を塗りたくった。

ラッカーをまずシンナーで薄めてから塗るのである。その時に少し、クンクンとシンナーの匂いをかぐ。なかなかいい匂いで気持ちが良くなってくる。セメダインやボンドの匂いもなかなかいい匂いである。

零戦を真っ赤に塗って自分が『零戦レッド』の戦闘機乗りになったような気分になってくる。夢想して楽しんでいた。

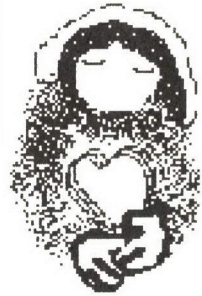
そこへ母の声。

「あんた、模型ばっかり作ってからに！ほんで、ペンキみたいなもん塗って。えんげ汚してからに！」

（くわた・よしひこ　プロデューサー／題字・版画とも著者）

●変な子じゃないよね

滝野澤 直子



「もう一生歩けません」と医師は言った。それを知っていながら、お見舞いの人たちは、「はやく歩けるようになるといいね」って。みんな勝手なことを言うんだから。いろいろな人が私のベッドサイドに来ては、私がどう思っているかを聞くことなく、自分の言いたいことだけ言って帰っていった。取り残された気分になった。

でも一番私を傷つけたのは、彼の優しい励ましの言葉だった。あんなにひどい喧嘩をして、あてつけがましく自殺未遂までしたくせに、まだ私は彼と切れずにいた。入院した私に彼はうそみたいに優しくなったから、まだ愛されているんだなんて、うれしくなっちゃったんだよね。彼にほめてもらいたくて、笑いかけてほしくて、一生懸命に車椅子をこぐ練習をした。それなのに、こげるようになっても彼はほめてはくれず、かわりにこう言ったんだ。「頑張って歩けるようになってくれ。信じて頑張れば、きっとできるから」。

できることなら私だって歩きたかった。でも、画期的に医療が進歩しない限り、頑張ったって無理なんだよ。首の神経が切れた体では、腰にも足にも力も入らないし感覚もない。立とうとしてもヘナヘナと崩れ落ちてしまうだけ。よくわかっていて、歩けるようになれと彼が言うのは、それが二人を

勇気づける言葉だと信じていたからだろう。「できないよ」と言えないまま作り笑いでうなずくたびに、心が少しずつ削られていく気がした。

歩けないことを彼は憂いていた訳だけれど、私にしたら車椅子をこげるようになったことを一緒に喜んでもらえないことのほうが、よっぽど悲しかった。だって車椅子をこぐことは、本当に楽しかったんだもの。最初はほめられたくて練習をしていたのが、自分で少しずつ進めるようになると、おもしろくてやめられなくなっていたんだ。腕にありったけの力を込める。タイヤが前に進む。このどうしようもなく当たり前のことが、たまらなくうれしいのだ。今生きていることが、次の瞬間の私の存在にまっすぐつながっていく。いとおしかった。きしむ車椅子も、病院のでこぼこの廊下も、ハアハア言ってる真っ赤な顔の自分も。ずっと欲しかったものを、手に入れたんだよ。

だから、努力を認めるとか、成果をほめてくれるとか、そんなの、もうどうだってよかった。一緒に喜んで欲しかった。車椅子をこぐ私の顔をただまっすぐに見てもらえたなら、どんなにうれしいのか、すぐに伝わったはず。でも彼は、今までとは違う私を、今までどおりの箱庭の、今までどおりのポジションに置こうとして、私の表情が見えなかった。そのポジションに上手に収まることが優しさのような気がして、私は頷いてしまった。

どんなに親身で熱意の込もった言葉でも、相手の人生をステキだと思えない人の言葉は、ときに中傷よりも相手の自信を損ない弱らせる。必死に練習してやっと靴下を履けるようになった私に、酔っていた彼は本音をこぼした。「靴下なんて誰にだって履ける。お願いだから歩けるようになってくれ」。

悲しかった。でも、悲しいと言える元気はなかった。

私たちの優しい関係は、それから三年かけてゆっくり自然消滅した。車椅子をこげるようになったあの時、どうして「私をちゃんと見て」と言えなかったのだろう。もし言えていたなら、もっと早くに別れることができたのに。

（たきのさわ・なおこ）

染と織の歳時記

第2回　吉村美加

私が、初めて草で染めることになったのは、十年ほど前でした。

やっぱり染織を仕事にしたいなぁと思って教員を辞めた春、不登校の子どもたちが集うフリースペースで、ものの作りのスタッフとして織物を教えないかと、友人に誘われて、週二日通い始めた、そこでのことです。

バザーで草木染のTシャツを売ろうなんて話が、スタッフの中に勝手に持ち上がっていたのを聞きつけたのか、誰かが勧めたのか……。ともかく「草木染をやりたい！」とのリクエストが、子どもから出て来ちゃったのです。染料を買って化学染をやって来た私にとって、草で染めるなんて何か頼りないし、自信もないし、不安でいっぱい。それでも、どんなになるのかなぁなんていう皆の興味をひしと感じる。それでいろいろ本で調べて、載っていた植物の中でヨモギをそこの近くの空き地でみつけて、媒染剤は危なくない鉄にして「ヨモギ染をやりまーす！」ということにしたのでした。

朝、「おはよう」もそこそこにヨモギを採集して来て、細かく切って、台所で煮ること、沸とうして三十分。染液をとって冷ます。冷ましている間に、お昼を食べる。食べたら冷めた（30℃）染液にぬらしておいた毛糸を入れて煮る。少しずつ温度を上げて六十分ぐらい。人肌ぐらいまで冷まして、洗って、鉄の媒染液を作って毛糸を入れて、煮沸二十分。糸を引き上げて冷まして、染液に一旦戻して五分。糸を上げて、洗って脱水。

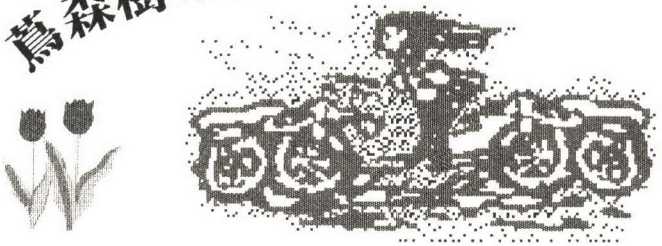
慣れていないし、もう一日がかり。脱水し終わった糸は、そんなに濃くはないけれどしっかりとしたモスグリーン。「すっごーい、きれい」との皆の声。この間けっこうな騒ぎでヘトヘトだったのだけれど、色を見たら、「本当だね、すごいね草って……」と誰よりも感心していたのは、きっと私で、以来、草木染とのおつき合いが続いているのです。

草木染から見えてくるものは、植物の種類はもちろんのこと、季節や、時間の流れ方、近所の庭の事までさまざま……。

「やりたい！」と言ってくれたはるちゃんに感謝しつつ、今日は、マリーゴールドの苗を買いに行って来ます。花で鮮やかな黄色が染まります。

（よしむら・みか／染織家）

鳥森樹の巡業日記



前回「はみ出してゆくぞ！」と気合いを入れた。その直後に、インフォームドコンセントの推進者、星野一正京大名誉教授と京都駅伊勢丹のプリクラで遊んでいたら、急に「声の周波数を上げることができるよ。それじゃ生活に不便でしょう」と耳元で囁かれてしまった。これにはグラッときて、はみ出した。声帯の手術を受けた。

人の声は150～200ヘルツの間のわずか50ヘルツの違いで、男声／女声というジェンダー認知を決定している。慣れたとはいえ、女姿と男声のジェンダー違和が生む対人緊張はひどく疲れるので、緩和される喜びは大きい。リハビリ後の新しい声も楽しみだ。

今回、初めての入院は手術以外にも得るものがあった。一日三食の食事と適正な量というのがどういうものなのかを理解したのだ。それで太り気味だったのが、あっという間にやせた。

だいたい、食事が苦手というか嫌いだったのがわたしだ。宇宙食や点滴みたいなものですませられないかなと思っていた。食べることに気がのらなかったのは「忙しい」ということではない。食べたくなかった子どもの頃からの気分をずっと今日まで引きずっていたのだ。毎日の食事は、怒鳴る父親と面と向かわなければならない最悪の時間だった。避けたい人間関係、嫌な感情と食事が結びついている。父親の常識や正しさから否定される自分と食事が結びついている。家庭というのは嫌なものだ、食事というものは嫌なものだ、それが根強く心に残り、自分が自分であるという意志は持てても、そういうわたしが「よりよく生きよう」という意志を育めなかった。食べることは生きることだとすると、食べたくないわたしは、生きたくなかった。それを認めるのに35年かかった。

「生きてね」という愛を食事に載せてくれた人たちを思い出し、愛に圧倒されて術後一週間の沈黙安静を過ごした。

感謝。留まらずに生きてゆくよ！

（つたもり・たつる／作家）

本をめぐる超！気まぐれなりれーえっせい

第2回　麻賀衿子

◆

西村しのぶ『一緒に遭難したい人』（主婦と生活社）

一〇数年前に流行った〝乙女ちっく〟漫画の、どこか劣等感を抱えた少女たちは、「君はそのままで素敵だよ」とメッセージする少年との恋の成就により、その劣等感を克服していった。

当時漫研少女だった私がいまだに、「まぁ、素敵♡」と思う異性のタイプは、見目麗しく、聡明で、正義感も強く、銀縁メガネの似合う、その少年の面影を残す人だったりする。大好きな俳優の内野聖陽（ご存知ない方は近くの若い人に聞いてね）の風貌はまさにそれで、おまけに彼の理想の女性が「ひとりで肩肘はってるやつ」（集英社『LEE』九八年三月号のインタビュー記事より）とくれば、〝闘う自治体労働者〟の私の瞳は♡♡！が、現実に付き合う相手は、そういう見た目とは大違いの小柄な、〝自分のことは自分でそれぞれ解決しようね〟という男だったりする。高校生で早々と女性問題とかに目覚めたせいだろうなぁ。

漫画家西村しのぶの描く女たちは、おしゃれで、自分の心にも欲望にも忠実。転んでもただで起きたりなんかしない。心優しい恋人（料理上手で、マメ！）を、もっと素敵に育てて（？）しまう。でも、その恋にもたれかかったり、溺れたりもしない。漫画って仮想現実でしかないけど、彼女たちの姿は格好良く、恋人は私が結局選んでしまう男にも、少し似てるかも。うふふ。

最新作『一緒に遭難したい人』の主人公キリちゃんは、明日のコメも底をついちゃう時もある物書きだけど、とにかく元気で自由。彼氏のマキちゃんもいいんだな、これが。空気を吸うのと同じ位の当たり前さでノホホンと、家事をこなすとことか、年上のキリちゃんへの「一〇〇歳も一〇二歳も一緒じゃーん」セリフとか。そうそう、マキちゃんは、お堅い税務調査官なのだけど、二人の間に職業とか収入差なんてギャップはさらさらなくて、それぞれがそれぞれの所で、自分を生きている。ちなみに彼はキリちゃんより背も低い。これまでの、少女漫画にもレディスコミックにもあまり出てこない設定は、なかなか新鮮だ。

作者は寡作な人で、出世作で超お薦めの『サードガール』（小池書院）も、本作も、掲載誌の休刊もあり残念ながら未完。ああ、続きが読みた～い！

（あさが・えりこ／闘う自治体労働者）

連載 第二回

肯定的な気持ちを伝える

河村 ふみ

フェミニストセラピーで、「自己主張トレーニング」というものを知った頃、強調されていたのは、女性は「ノー」がなかなか言えない。「ノー」を言えるようにしようということに主眼が置かれていたように思います。女性は「ノー」が言えないということは、今もあまり変わらないと思いますが、かといって、いきなり「ノー」を言うトレーニングから入るというのはちょっと無理があるようです。

フェミックスの講座では、まず、肯定的なことを言う訓練から入ります。これは、実はATではなく、「自己尊重トレーニング（自分を好きになる講座）」の中で経験的に編み出したもので、講座の最初に、「ほめる／ほめられ練習」というのをやってみたのが最初でした。一人の人を全員が何でもいいからいいところを見つけてほめるというものです。

たとえば、「今日のAさんのセーターは、とてもよく似合っている」とか、「今日のAさんは、さわやかな感じで素敵」だとか、人柄からファッション、髪形まで何でもいいからほめようというもの。

否定的なことはなかなか言いにくいけど、ほめるのだったらまだ言いやすい。ほめられる方も気持ちがいい。ほめられるトレーニングでもあるので、決して「そんなことはない」なんて否定しないこと、「うれしいわ」とか「ありがとう」と言う。これも、肯定的なことを表現する練習になります。

女性は、ほめられることに慣れてない人が多いのです。ただでさえ、謙遜は美徳のお国柄。ほめられても「そんなことはありませんわ」とか、「とんでもない」と否定するのが、女らしいとされてきました。でも、ほめられてうれしくない人はあまりいないはずだし、うれしいなら「うれしい」と表現するのが、つまり、気持ちと表現を一致させるのが、自己表現の基本ですから、ほんとはうれしいのに、「それほどでも……」ではペケなのです。

肯定的なことを表現するって、でも、照れちゃうもんですよね、慣れないと。私も、最近では照れずに言えるようになりましたが、以前は、心で思っていても、なかなか素直に表現できませんでした。なぜか、相手に媚びてるような気がしてしまったりして、あるいはそう受け取られるんじゃなかろうかと。

いいなと思えることを、さらっと言えるようになると、自分も気持ちが楽だし、相手がうれしそうにしてくれれば、こちらもうれしくなります。

もし、職場などで、どうも苦手な人がいるとしたら、そういう人でも一つや二つはいいなと思えるところがあるはずですから、そう思ったら勇気を出してそれを口に出してみてください。一つもないですか？それでも大丈夫。そういう場合は、積極的に気持ちをこめて「あいさつ」をこちらからしてみてください。

「あいさつ」の効用も、実はカウンセリング講座で「フォーカシング」というのを取り上げた時に、再認識したものです。「あいさつ」というのは、あなたがそこにいることがわかったよと、存在を認めてるよというメッセージなのです。たとえば、見知らぬ人ばかりのパーティーで、ちょっと知っている人の顔を遠くからみとめたとします。そのとき、自分の中だけで、ああ、あそこに○○さんがいるなと思っただけなのと、会釈したり、手を振ったりするのとでは大きな違いがあります。

「あいさつ」するときは、相手の目を見て、はっきりと言うことが大事です。下を向いてモゴモゴ言ったのでは相手に通じませんし、自分の気持ちもよくありません。講座ではそのあたりのボディランゲージにも気を配ります。

それから、相手の名前を呼んでのあいさつもすごく気持ちのいいものです。これは、本誌の連載者でもある蔦森さんに教えられました。

あるとき、蔦森さんがフェミックスに来られた時、私はコピー機の前で、何かのコピーをとることに没頭していて、蔦森さんがいらしていることは知っていたけど、他の人と話をしていたので、わざわざ邪魔をすることもないだろうと思って自分の作業を続けていました。そうしたら、蔦森さんの方から「河村さん、こんにちわ」と言われたのです。「あ、こんにちわ」と遅ればせながら答えたものの、バツが悪くもあり、でも、蔦森さんのその名前を呼んでのあいさつはとても新鮮でした。

それ以来、講座では機会ある毎にこのエピソードを話し、「自分は言ってるつもりなのに、相手は無視するんだ」という参加者の訴えには、実際に、役割劇でやってもらって、本人の言っているつもりは相手にはどう伝わっているかを確認するとともに、相手が聞こえない振りをする場合には、名前を呼ぶと

いうスキルを伝授しています。自分の名前を呼ばれたら、そうそう無視できませんよね。それでも無視するような人は、それだけの人だと思ってあきらめましょう。

Weの夏季フォーラムに行くと、いつも私は関西のウイの会の人たちに関心させられます。実にさわやかに元気にあいさつされる方が多いのです。私は、自分があんなふうにくったくなくあいさつしにくいのはなぜだろうとよく考えるのですが、どうも、小さい頃からあいさつを強要されたことに原因があるのではないかと思っています。近所の人や親戚の伯父さん伯母さんが来ると、「ほら、ちゃんとあいさつしなさい」と。私はそれが嫌で嫌で、できるだけ顔を会わせないようにしていました。

先日、中学生の子どもの野球の遠征の付き添いで、大阪に行きました。全国から32チームが参加し、地元のチーム以外は、一つのホテルに宿泊していましたので、20チームからの選手たちが同じホテルに泊まっていたわけですが、ご存じのように、スポーツ界では、「あいさつ」の強要が濃厚です。

で、一歩部屋を出ると、「チワーッ」の嵐。特に食事のために食堂に行くときには、全員が集まってくるので、何度私も「チワーッ」と頭を下げたことか。一緒に行ったお父さんの中には「食堂に行くのが怖い」とあいさつ恐怖症になってしまった人もいました。こんなふうにロボットみたいにあいさつをするのを薦めているわけではありません。まあ、彼らの中にも強要されたからではなく、自分の意志であいさつしている子もいるとは思います。

脱線してしまいましたが、肯定的な表現に戻りましょう。相手のいいところを見つけて、それを表現しあうというのは、いろいろなワークショップでも行われているようで、そういうワークショップに参加した講座の受講生が、家に帰って、さっそく恋人との間でやってみたら、これがとてもよくて、お互いに優しい気持ちになれたと言っていたことがありました。学校のホームルームで、これをやったらいいだろうなと思います。家でも、相手の欠点ばかりあげつらってないで、いいところも思っているなら素直に伝えられるといいんですよね。そうしたら、否定的なこともっと言いやすくなるかもしれません。ただ、これは否定的なことを言いやすくしたり、要望を通すための手段ではありません。「子どもは10誉めて2叱れ」式な教育訓ではなく、あくまでも、

自分が感じていることを素直に伝えるというだけのことです。相手を支配したり操作したりするために誉めるのはATの理念に反します。

とここまで書いてきて、私も連れ合いに対してもっと肯定的なことを表現しないといけないなと思いました。最近、朝起きると、台所がきれいに片付いている。でも、「ありがとう」と言うには抵抗がある。「ありがとう」と言ってしまうと、本来は私がやるべきことをやってやっているという風に受け取られかねない。そこで、「うれしいわ」とだけ言うことにしました。「うれしい」ことに変わりはないのだし、これなら害もない。

蔦森さんの話が出たついでに、「We」の裏話を一つ。蔦森さんの連載のタイトルを新年度から「ほめよ、たたえよ、ウソをつけ」にしたいという提案が蔦森さんからなされました。私は、実にいいタイトルだと思ったのですが、いざとなると、ちょっとねー、どうかしら、不謹慎だと思われるかもという意見も出て、この案は没になってしまいました。蔦森さんは、相手を喜ばせるようなことしか言わないようにしたら、仕事もどんどんくるようになったので、今年はこの精神でいくんだということでした。

私は、根が正直なので、ウソをつくことはできませんが、時にはウソも方便でウソが役に立つことだってあります。自分がウソをついているという後ろめたさがなくて、相手を傷つけない害のないウソなら、相手をいい気持ちにさせてエンパワメントできるようなウソなら大いに歓迎したいところです。

でも、ATから言うと、これはかなり上級のスキルです。否定的なことをやんわり表現したり、ユーモアで返したりするのと同様に。ですから、まずは初級から始めましょう。

肯定的なことって、特別いいことでなければならないと考える必要はないと思います。ごく当たり前のことでいいのです。たとえば、エレベーターに乗り合わせた人に、

「今日は天気がよくて気持ちいいですね」

子どもに、

「学校に間に合う時間に起きられてよかったね」

相手の話に関心したときに、

「それ、おもしろいね」

「それはいいね」

「それ、すごいね」

（かわむら・ふみ／フェミックス・カウンセラー）

居場所考36〈サイズの想像力〉

水田宗子

アメリカにはいつも「巨大な」というイメージがつきまとっている。一九六〇年代の初め、アメリカに行ったときは、プロペラ飛行機の時代だったこともあって、サンフランシスコからニューヨークまで、アメリカ大陸を横断するのに何時間もかかった。広大な砂漠や森林や平野を越えていきながら、やっぱりアメリカは大きいと感心したものだった。ニューヨークでは、写真で見ていたスカイスクレーパーの実際の高さに圧倒されて、アメリカの、サイズの大きさへの誇りとこだわりに納得した感じがした。事実、アメリカでは、サイズの大きさと価値の高さは、ほとんどの場合、一致していた。大きな家、大きなベッド、大きな冷蔵庫、大きな車、大きな肉、すべてThe large is beautiful.なのである。

それに比べて日本には、小さなものへの嗜好と礼讃がある。『新古今集』に特徴的な微視的な感覚、小さな空間に宇宙を見る盆栽の想像力、権力への反論としての『方丈記』の思想と、日本には「縮み思考」と批判されるほどに、単に小さいものが好きだというだけではない、逆説的思考としてのサイズ想像力、小さいもの礼讃思想がある。

だが、アメリカに住んで一年ほどもたつと、アメリカにも逆説的サイズ思考があることに気がついてきた。たとえば私の好きな作家たちはみな、縮み思考の作家たちだ。エミリー・ディッキンソンは、隠遁生活さながら、都会から遠く離れた田舎の自分の家の中という小さな空間に閉じこもりながら、宇宙ほどの広がりを内包する「短詩」を書いた詩人だし、エドガー・ア

ラン・ポオは、石川啄木にも匹敵する貧窮と文壇的無視の中で、狭い小屋で毛布一枚にくるまって寒さをこらえながら、百五十年後の今でも多くの読者に愛される「短編小説」を書いた。

ディッキンソンは、四行詩をはじめとする短い詩をアメリカ文学では初めて書いて、のちに俳句からインスピレーションを受けてイマジズム詩運動を起こしたパウンドやH．D．に大きな影響を与えた。ポオもまた、長編小説だけが小説だと思われてきた西欧文学の伝統の中で、物語の完結性と表現の効果を要とする、短編小説というジャンルを生み出したり、詩とは一回の読書で、一度座ったらそのまま椅子から立たずに読み切れる長さでなければならないと、短い詩を推賞した。短歌や俳句の国の人間には、新しくも珍しくもない理論だが、それが日本文学との接点を用意しただけではなく、近代詩や近代文学の揺籃となり、その発展の下敷きを用意したとなれば、キーワードはサイズだったのである。

無名のうちに人生を送った、これらの作家たちの想像力を衝き動かしたのは、アメリカ的巨大さへの反論としての「小ささ」という、サイズの想像力だったと言えるのだろうが、その反アメリカ的成功志向への反論としての小ささの思想は、ヘンリー・ソローの有名な『森の生活』に、明確な思想的表明として描かれている。そして、ソローは、反アメリカ的作家どころか、もっともアメリカ的な作家、アメリカの最良のモラルを体現した思想家と考えられているのである。小ささ志向は、アメリカの巨大崇拝の反措定であると同じに、アメリカニズムを補完する、相補的な思想ともなってきたわけである。

アメリカに何年か住んでからイギリスへ行くと、何もかも小さいサイズであることが大変面白かった。背が高いイギリス人が、小さなレストランの小さなテーブルや椅子が立て込んでいる中で、窮屈そうでもなく寛いでいる様子が、なんとなくユーモラスな感じだった。イギリスには、『ガリヴァー旅行記』や『不思議の国のアリス』という、サイズ想像力が核になった極めつけの作品がある。スウィフトとルイス・キャロルという、ともに一筋縄では行かぬ、頑固な変わり者

として名高い作家の作品だ。巨大さが権力と成功の象徴なら、小ささは自由な精神の象徴とばかりは言えない複雑な屈折が、彼らの小さいサイズ、小さい空間にひしめいている。

イギリスを出てポーランドに行くと、さらに根深いサイズ・コンプレックスを目撃したように思った。当時はワルシャワの街はいまだに戦争の爪痕を色濃く残したままで、都市復興の作業が続いていた。郊外には近代的で大規模な集合住宅などが建てられている一方で、市街の中心部では、ナチスによって破壊された建物を出来得る限り忠実に復元し、建て直す作業が行われていた。復元される建物は、今でいうエンピツ・ビルのような、小さな、細い建物で、マーケット広場を囲んで、互いに肩を並べてひしめきあっている。それらは確かに伝統的で、美しい建物だが、貴族階級の住居だったのだから、かりにナチスに破壊されなかったとしても、階級社会の遺物として、政府が真っ先に取り壊してもおかしくない。それなのに政府が古い建物の復元に乏しい国費を使っていることに、私は何か違和感を覚えた。

しかし、数週間近く滞在している間、あれはソ連の建てた建物、これもソ連の建てたビル、という友人の説明を聞いている中で、それらの建物に共通する特徴が、まずサイズであること、つまり、それらがじつに巨大なビルであることに気がついた。すると、なぜ、ワルシャワ復興に、あの古い小さな建物の復元が必要なのかが理解できたような気がしたのである。それは、貴族や階級やナショナリズムというよりは、反ソ連なのであり、ソ連による巨大なビル建築に対するサイズという反権力の表明であり、新しいテクノロジーに対する復元のテクノロジーの反抗のように思えたのである。

それにしても、「縮み思考」が得意の日本が、東京都庁のような巨大な建物を建ててしまったのは、いったい何に対する反措定だったのだろう。不況の風が強く吹くこの頃の東京の空に聳える都庁ビルを見るたびに、都民の生活を無視してバブルの富と権力を顕示した、過去の遺物を見る情けない気がしてならない。

（みずた・のりこ／日米文学比較・フェミニズム文学批評）

大阪　村上昌子

読ませてもらっているだけの、元気のないＷｅ読者です。

今時の高校生の変容ぶりに、たちすくむ思いで日々学校暮らしをしているのですが、みなさんの目の前の生徒さんはどんな様子なのでしょうか。

「学校は好きだけれど教室は嫌い、まして授業は大嫌い、ひたすら時間が過ぎるのを待つ」から、「授業中でもいつでも自分の時間、したいようにしかしない」へと変わってきたように思います。そして、「勉強する」というのは「黒板の字を写すこと」でしかないので、おしゃべり、ウォークマン、マンガ、睡眠等々、何をしていても、書き写したノート、プリントを提出しさえすれば「自分はちゃんとやっている」と思っているみたいです。「こちらの伝えたいこと、聞いてほしい」「こんな事に取り組んで、ちょっと何かを感じてほしい」と思っても、ちらっと一瞥し、心惹かれるものでなければ、あとは自分たちの世界で自由自在……。

その「心惹かれるもの」は何かと、あれやこれやと投げかけて見るのですが、多くは空振り。

「オホーツク」や「フェンス」をいつも楽しみに読ませてもらっていますが、鶏をつぶす勇気もなく……。

授業って何？学校って何？高校生って誰？哲学してしまうことに落ち込んでしまいます。

「先生頑張りすぎるほどがんばってるのにかわいそう」とか、「うるさい子はほっといて強引に黒板に書いていって授業すすめたらいいのに」などマジメな、支えてくれようとする子もいるのですが、「それもちがうよな……」とやっぱり落ち込んでしまいます。

新しい教育課程で、家庭科は2～4単位の選択必修になりそうだとか。学校ごとの選択で、「進学校」では2、「困難校」では4、というような結果になっていくのでしょうか。

授業内容以前での、授業の成立が問題の今どきの学校で、どのような家庭科を提案していけるのかと、押したり引いたりの日々が続いている私です。

神奈川　加納実紀代

左記のようなつどいの企画に関わっています。私はシンポジウムと「性」の分科会担当ですが、家庭科（教育）や家族などの分科会もあります。ぜひご参加ください。

■第七回　全国女性史研究交流のつどい

日時　1988年9月5日（土）～6日（日）

会場　神奈川県立かながわ女性センター

主催　「第七回全国女性史研究交流のつどい」実行委員会

参加費　5500円（資料代含む）

託児（2歳～就学前まで）

申込み締切　5月31日

◎事務局0466（27）2115

一日目（9月5日）10時～17時

○分科会　1メディア「戦後のメディアにみる女性の地位」／2国際交流「国際化と女性たちの市民活動」／3政治参画「女性参政の道のり　輝くあしたへ」／4教育「占領期教育改革と男女平等の理念」（報告者・半田たつ子他）／5労働「女性の働き方をめぐって」／6家庭「『嫁』という位置を問う」／7戦争と平和「被害を語り継ぎ、加害を考える」／8性「『慰安婦』・基地売春・買売春」／9地域女性史「地域女性史を考える」。

二日目（9月6日）

○全体会　10時～12時

コーディネーター　関千枝子・ゆのまえ知子

○シンポジウム「女性史を問う」13時～15時。

上野千鶴子・安丸良夫・折井美耶子・加納実紀代

女たちの情報紙
ふぇみん
femin
婦人民主新聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

見本紙、お届けします。お問い合せ下さい。

草の根は伸びつづける。

からだのしんぱい
はたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのうごき
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなたのいけん
おんなというちから。

世の中に？をもち始めた、男たちにも。

新聞代
（送料込）
1ヶ月　750円
3ヶ月　2,250円
6ヶ月　4,500円
1　年　9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

創立以来、無党派の立場で50年。
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301
TEL 03(3402)3244、3238
FAX 03(3401)3453

大阪府協　大阪市北区中崎西3-1-5
TEL 06(371)2429

ふぇみん婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集

◆気候が不順ですっかり体調が悪く、風邪でもひけばいいのだろうが、その暇はない。せめて休養でもと、講座が休みの期間を利用して吉野の桜を見に行ってきた。満開の盛りを過ぎて風に舞う花びら、花びらの絨毯の上、陽光を浴びて撮った写真は、こちらも盛りを過ぎてしまったけれど、まだいけそう。夫の暴力が原因で離婚した友人が、１年目に再婚。しかも、９歳も年下の男性と。それを聞いたとき、なぜかうれしくなった。私より彼女は１歳上なのだから。（河村）

◆花粉症の後、風邪をひいて、おまけに二日酔いで苦しんだりして、ぼーっとしてる間に桜も散ってしまいました。はっと気づくと締切がいくつも重なって、いきなり超！集中状態にシフトしています。

先月故障したマックはついに買い換えてすっごい！バージョンアップしたのに、今度は印刷機が機嫌を損ねています。ひたすらコンピューターに機嫌をとってつきあっていただいている私です。先月メールでお便りくださいねと書いたらいくつもお便りが来て嬉しかったです。（中村）

◆「奥様」と呼ばれる状況は居心地が悪い。そういう心持ちを涵養した種々の事情で「主人」という言葉にも馴染めない。先日あった選挙の市民派の女性候補者からの郵便物に困惑しつつも面白かったから書いちゃえ。宛て名は私、並べて「旦那様」と書かれている。間髪を入れず私の頭の中では三船和子が超クローズアップになって♪ワタシノダイジナダンナサマァ～♪と唄い上げる。死んでも「主人」は使わない人もこの候補者の支持者にいるかもしれないとはいえ……。（吉田）

◆フェミックスは「みんな違って、みんないい」と思っている人たちばかりなので、自分を偽る必要もなく、気楽にいられるところです。しかし、ヒトに気を使わせる気難しいヤツもいるんです。パソコンがそいつです。「きれいにしてあげよう」「もう少し待ってから」「『気』を通して……」などとみんなでご機嫌をうかがう毎日です。人間より機械とのお付き合いの方が面倒でややこしいんです。（山下）

◆木村栄さんの連載を読んでうれしくなってしまった。「忘却力」と「灰色受容力」なら私に任せて。ついでにいつでもどこでも（たとえ歯医者の治療の最中でも）眠れる力、この三つが私の数少ない誇れる能力です。今日は誕生日。晴れて５０歳。だんだん制約がなくなってくるからこれから何をしてやろうかなとワクワクして来ます。◆先月号掲載の「べてるの家」のＦＡＸ通信「ぱぴぷぺぽ」を見せてもらいました。全編ほのぼのした漫画でアハハと笑って一日穏やかな気分で過ごせる希有な通信。早速申込みました。この編集後記も漫画で描けるように芸を磨きたいものです。自分の悩みを漫画に描いてお互いに変だ変だと笑い合うワークショップなんて、やると最高でしょうね。（稲邑）●出せば赤字の月刊誌。いろんな仕事しながら稼ぎをつぎ込んでなんとか続いていますが、そろそろ限界かも知れません。継続手続きがまだのかた、ぜひともよろしくお願いいたします。今月中にお申し込みのない方は次号から中止にさせていただきますので、継続ご希望の方はご一報下さいませ。●6月号の特集は多様なフェミニズムです。（編集部）

くらしと教育をつなぐＷｅ　62号（Ｖｏｌ.7　Ｎｏ.2）　1998年5月１日発行
〒154-0001　東京都世田谷区池尻3-2-3-703　ＴＥＬ／ＦＡＸ　０３（３４２４）３６０３
E-mail　femix@mail2.alpha-net.or.jp　郵便振替 00130-7-754314（有）フェミックス
定価630円（税込み）年間購読料6800円（送料共）　富士銀行 池尻大橋支店 普1501277
発行／フェミックス　編集／稲邑恭子　中村泰子　吉田静恵　印刷／（有）イー・エム・ピー

Femix information

怒りのワークショップ・シリーズ

怒りと対話してみよう！

好評につき
第2弾！

カッとしたり、イライラしたり、グゥーっとくる。
怒りはいろいろなかたちでやってくる。
そんな時体は私の体はどうなっているだろう？
怒りの気持ちは何が言いたいのだろう？
気持ちよく表現する方法ってあるのかな？

◆パートⅠのメニュー

1．始まりはゲーム
2．自己紹介　－私はおこりんぼうです－
3．怒りとの対話
　－体が表現している怒りに気づく
　　怒りからのメッセージを受け取る
4．ディスカッション

日　時　1998年5月16日(土) 13：30～16：30
場　所　新宿区内（申込時に連絡）
対　象　女性　　定員　20名
参加費　4000円
体をしめつけない、動きやすい服装でご参加下さい。
バスタオルをご用意下さい。

◎シリーズの予定◎　◆パートⅡ（9月）テーマ：怒りを科学する
◆パートⅢ（11月）テーマ：怒りを表現する

●お申し込み・お問い合わせは、フェミックスカウンセリング部門まで
〒154　東京都世田谷区池尻3-2-3-703
電話/FAX 03-3424-3603
◎振込銀行：第一勧業銀行渋谷支店　普4051714　㈲フェミックス

連載

- おんなが歳をとるということ　木村栄
- シネマの魔　武田秀夫
- いきいきごんぼ　桑田良彦
- 変な子じゃないよね　滝野澤直子
- 染と織の歳時記　吉村美加
- 蔦森樹の巡業日記
- 本をめぐる超！気まぐれなりれーえっせい
- 自己表現トレーニング　河村ふみ
- 居場所考　水田宗子

女と男の家庭科新時代

- 私の家庭科ラフスケッチ
- 家庭科-風がかわる匂いがかわる
- 楽市楽座　加藤昭仁
- かる～い家庭科相談室
- オホーツクの潮風荒く　江口凡太郎

くらしと教育をつなぐWe
1998年5月1日発行　第7巻第2号（通巻62号）
定価630円（本体600円）年間購読料6800円（送料共）
郵便振替　００１３０　７　７５４３１１フェミックス